
君がいるから

柚果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいるから

【Nコード】

N5529D

【作者名】

柚果

【あらすじ】

杏は高校二年生。ある日、嫌味なくらい容姿端麗なヤツと最悪な出会いをする。しかも偶然にも数日後に再会してしまう。その上親友のせいで何度も会うハメに……。

プロローグ

私の家庭環境は少し複雑だ。

と言っても大きく不満があるわけじゃない。
両親の仲は至って良好だし。

小学校5年生の時、父の海外転勤を理由に両親は離婚。
いわゆる円満離婚というものだろうか。

私は父方へついて行きアメリカへ、
2歳上の姉は母方へつき日本で暮らしていた。

一年前のこと。

姉が交通事故で死んだ。

原因は相手の脇見運転だったらしい。

姉の死を機に、父と私は日本へ戻ってきて母と暮らしている。
つまり離婚した夫婦が元の家で一緒に暮らしている。
でも姓は離婚した時のまま。再婚はしないそうだ。

姉のことが悲しくないといえは嘘になるけど、

もう落ち込んではいない。

今は家族3人。平凡に暮らしています。

第一話 意味不明

ただ今夏真っ盛りの8月…とりたいところですが8月下旬の下旬。学生たちの天国、夏休みが終わろうとしている。

夏といえばここ…そう、海に来ています！

照り付けんばかりの太陽…ってか暑すぎる！乙女の肌に焼き色つけたらどうしてくれんだ!?

白い砂浜。…ま、実際は海草やら空き缶やら転がってますけど。

そしてなんと書いても人、人、人！！

…ってテンションあげてみましたが、正直帰りたい

一緒に来た女の子達が私を呼んでいる。超高速スピードで手招きをしている。

…イヤな予感。

あ、ちなみに私の名前は、立花タチバナ 杏アンです。

やる気のない自己紹介でどうもスンマセン。

だって今現在、心の底からやる気ないですから。

とは言ったものの、大声で呼ばれてるし。行かないと後でうるさいのでとりあえず走る。

「何？財布でも忘れた？」

「ああ！杏遅いよっ！！」

私の肩を持ってガンガンガン…脳みそ回るんで止めて下さい。直ちに。

ここまで言っておわかりかと思いますが…え？わかんない？…もっと洞察力磨けよ。

嘘です。大嘘です。

と、まあ話を戻して。そう、特に仲が良いわけではなかった中学の元クラスメイト。ってところですよ。

何でか知らないけど強制的に連れてこられた私。全く持って意味不明。

「…で、何？何なのそこまで急用？」

んなわけないけど一応聞く。ああ、どんどんテンション下がってきた…

「通訳してっつー!!」

は？

「杏！英語大の得意でしょ！？よね！？っつか絶対そう!!」

…耳元でデカイ声を出すな。そして勝手に決めるな。まあ、英語は話せるけどさ。

何でって？

私、帰国子女なんですよ。4年間アメリカにいたんで、話せないほうがありえない環境ってトコ？

「話せるけど、通訳？何で？」

喋りたきゃ自分で喋れ。その冗談でも笑えない英語力で。

…主人公にしては口悪いと思われているでしょうが、ご勘弁下さい。早朝に起こされ、このテンションで今まで…頑張ったって誉めてもらってもいいくらいだと思っ。

「いいからほらアレッツ！見て！超イケメン!!」

原形を感じさせない顔で甲高い声を発する友達B。

つけまつ毛取れてますよ。気付くまで黙っててやるっ。

バンバンと遠慮なしに私の肩を叩く。

そろそろ肩が限界に達しそうなので、素晴らしくうっとおしい顔で、友達Aが指差す方向を見た。

そこにはいたのは気味が悪いくらいに端正な顔立ちの人…マネキン？あ、動いた。つつか背高っ！

「ね、超カッコいいでしょ!？」

友達A、Bはハモる…ああ、うるさい。

第二話 通訳と笑顔

確かに世間一般に言う

「イケメン」がそこにいた。

しかも外人？ハーフ？

とにかく純日本人じゃないことだけは確かだ。
髪は黒いけど。

外国人を見慣れてる私には何の驚きもない。はずだ…

「お願い！話しかけて！？日本語で話しかけたら”あいきゃんすぴーくじゃぱにーず”って言われちゃったの！！」

8

…問題ないじゃん。日本語喋れりゃ十分だ。

目をキラッキラさせながら私を見る友達A、B。
…だからつけまつ毛取れてますから。

めんどくさい。とにかくめんどくさい。
冗談抜きでめんどくさい。

とにかく早く終わらせることが一番。
要するにアレだ、ナンパ目的っしょ？夏に大発生する迷惑極まりないやつ。

早々に断られる。

「Is it good in English?」(英語でいいですか?)

話しかけた途端、マネキンは驚いたような表情を見せた。

うわ。目の色すごい色素薄い。
答えないけどそのまま続けてやれ。

「They seem to want to talk with you.」(彼女達があなたと話をしたいそうです。)
Therefore, please decline it clearly. (だから、はっきり断ってあげてください。)
Will it be troublesome? (面倒臭いでしょ?)

これでジ・エンド。
さあハッキリキツパリ断つてくれ、マネキンさんよ。

「Are you a Japanese? (…あなた日本人ですか?)」

意外な答えが返って来た。

「何見当違いなこと言ってんだこのマネキン？
こっちは生粋の日本人だっつーの。」

それより早く断れっ！

「I'm true Japanese. (正真正銘の日本人です。)
Please decline it earlier than
it. (それより早く断って下さい。)
I want to return early. (私、早く帰りたいんです。)」

息継ぎナシ早口で伝えると、マネキンは一瞬顔が笑ったように見えた。

えーと、暴言吐いていいですか？この失礼なマネキンに。

「I'm sorry. I say immediately.」
ごめん。すぐに言うよ。」

そう言いながらも口元笑ってますよね？失礼極まりないんですけど。

「ゴメンナサイ。ワタシ用事アリマス。」
にっこり嘘臭い笑顔を振りまいてマネキンは言った。

「そ、そうなんだ！じゃ、じゃあまた今度会ったらお話ししましょうねっ！！」

友達A、Bはいつもより2割り増しで声が高い。

「アリガトウゴザイマス」
これまた作り物のようにさわやかな笑顔で言う。本当にマネキンだ。

友達A、Bはそのマネキン顔に赤面ぶっこいて走って行った。おい、私の存在忘れてますけど。

「I'm sorry that I'm noisy.」(うんうん)
くすくすいまん。
Then... (じゃあ...)」

一応謝る。何で私がつて感じただけど。

そう言つて去るうとした時、とんでもない言語が私の耳に入つてきた。

「大変だね、友達のお世話も。通訳さん？」

第二話 通訳と笑顔（後書き）

英語がおかしかったらすいません・・・一応調べたつもりです。

第三話 流暢なマネキン

…今何て？

…はつきり言いましたよね？日本語ですよね？日本語お！？

「…日本語話せるんですか？ってか話せますよねかなり流暢にっ！」

”流暢”のところをあからさまに力込めて言ってやった。

「うんペラペラ。ごめんね？ああいうのには一番手っ取り早い方法だからね」

「…それでも伝わってませんよ。」

あの「I can speak Japanese」って言われたって言ってましたから。

ま、多分意味わかってないでしょうけど「

別にどっちでもいいよ。日本語わからない人になれれば「

…うっわっ。こっちがバカみたい。

「…そうっすか。私には関係ないんでどっちでもいいです。じゃあ」

踵を返そうとした私に向ってマネキンが喋った。
やっぱりマネキンっぽい顔をして。

「そこまで英語話せる同世代初めて見た。上手いね、発音」

そりゃどうも。こっちは本場で修業した身なんでね。
駅前ハイスクールなんて目じゃねえっつーの。

私は何の反応もせずにそそくさと引き返した。

ああ…もう寝よう。帰って速攻で。3秒で夢の中だっ！

「恭介〜！腹減ったから何か食に行こうぜっ！」

「ん？ああ、そうだな」

「何？何笑ってんの？」

「…恭介半笑いの顔やめろ」

「ん。ちょっとな。面白い奴がいたからさ」

私が過ぎ去ったあとにこんな会話がされているなんて。

私は知る由もない。

第四話 ファミレスにご注意

全然待ち焦がれていない始業式。

「杏、こないだ会ったときより焼けた？」

人が気にしていることをズバつと言ってくれたのは、
私の幼稚園からの腐れ縁：もとい幼馴染みの上原^{ウエハラ} 沙希^{サキ}だ。

「…元同級生に海に強制連行された」

「海？まだ行く人いるんだ」

「結構いたよ。びっくりするくらい楽しくなかったけど」

今思い出しても意味不明。

何で私が連れて行かれたのか。

そう言うと沙希が呆れたように言った。

「そんなの決まってるじゃない。理由なんて1つよ」

「…何よ？」

「狩り成功率アップの為の最終兵器」

…人を兵器呼ばわりするな。しかも余計に意味わかんないし。

「ね、今日始業式だけですぐ終わるでしょ？お昼食べて帰ろうよ？」
「いいよ。じゃあいつものところで」

いつものところっていうのは駅の近くのファミレスだ。
学生のサイフに優しいのでありがたい。

「いらっしやいませ何名様ですか？」
「2人です」
「ではこちらへどうぞ」

やっぱり時間的にも混んでるなあ。
何食べよっかな？だいたいメニュー見なくてもわかるし。

「じゅっくらじゅん」

マニュアル通りの接客をした店員が戻ってく。

わかっていてもやっぱりメニューは開いてしまう。

「あ」

やっぱりカルボナーラ…って、え？

今なんか声があったような…したよね？

ちらつと視線を向けると、声を出したであろう人と目が合った。

あ。

その瞬間、私は考えるよりも先に言葉が出ていた。

「マネキン！」

第五話 マネキンとその仲間達

日本中にファミレスなんてゴマンとある。

ファミレスじゃなくてファーストフードって手もあった。

少しでも時間がずれていればこの席じゃなかったと思う。

何で今日に限って全てが揃ってしまったんだろう。

あの色素の薄い目と視線があつたまま私はそんなことを思った。

「…マネキン？」

マネキンは明らかに顔に？を浮かべ、少し顔を傾けた。

しまった！ほぼ初対面の人に失礼発言っ！

「通訳？」

大きな丸い目を私に向けて、大きく顔を傾ける。

「多分俺のこと外人と思ったんじゃない？」

「…カツコ悪」

かちん。

マネキンの斜め前。

つまり小柄な男の子の隣に座っている奴が面倒くさそうに言った。

シャープな顔にキリっとした目。でも、なんだかだるそうな印象を受ける。

っていうかすごい失礼じゃないか！？初対面の人に！

人のこと言えないけど…

「だいたいね！アンタが日本語喋れないフリなんかするからっ…！」

今にも席を立ちそうな程な私。 やばい…むかつく。

「…杏一回止まって。店員さん困ってるから」

呆れ顔で沙希が私を制止する。

チラッと目を向けると明らかに困っている店員さん。

「あの…ご注文…お決まりでしょうか？」

こんな時でもマニュアル通りなんですわね…。

第六話 カルボナーラはいつも通り

カルボナーラのパスタはいつも通りおいしそうだ。

ファミレスだから所詮冷凍だろうけど私は好きだから問題ない。

でも今日はいつものような味に感じられない。

…ま。原因は私の隣しか考えられないんだけど。

「じゃあ、こないだの海で会ったんだ？俺たち3人でいたんだけどなあ」

小柄な男の口。こと、野田^{ノダ} 彰^{アキラ}は不思議そうな顔で言った。

「お前ずっと泳いでただろ」

「あ、そっか。じゃあ会わなくて当然だ」

納得。と言わんばかりの笑顔。

…さわやか少年。この形容詞がぴったり似合う感じだ。

「まさか杏がナンパとはねえ…そういうの嫌いなのに」

だから通訳だつてば！！聞いてます！？沙希サンっ！

「ね、それって中央高校の制服だよね？俺たち北野高なんだ！」

「そうだよ　って近いね！駅同じっ」

沙希と彰くんは何だか盛り上がってる…ほっとこう。

私はとにかく隣を見ないことに決めて、カルボナーラを食べ始めた。

「アンタ何であんなに英語喋れんの？駅前留学？」

隣からマネキンの声がする。

…見ないって決めたのに。チツ。

「…アメリカに4年住んでたの。だから」

質問されたら答える。ああ…私って律儀な人間だな。

「…アメリカ？」

今まで沈黙を通していただるそうなヤツ。
こと、灘波ナシバ 慶ケイが口を開いた。

「?うん、そうだけど…」

何だ?アメリカに興味あるのかな?

「何?慶、アメリカ好き？」

私が思ったことをマネキンが聞いた。うわ…思考回路おんなじ。

「…別に。ってかアメリカ好きの意味がわからん」

…何気にツツコミキャラ？意外だ。

「で、なるほどね。そりゃ発音も本場なわけだ」

いきなり話を戻される。

灘波 慶はまただるそうにしている。

「…アンタは？」

「生まれも育ちも日本。日本語は得意中の得意」

日本人！？…なわけないよねこの顔で。

「日本とイギリスのハーフ」

…聞いてないのにペラペラ喋るヤツだな。

「顔に書いてるよ。何人だ？って」

ニヤリ笑うマネキン…こと、
水嶋 ミスシマ
恭介 キョウスケ

…どうやらやっぱり私の嫌いなタイプらしい。

第七話 親友は絶対的

「あの3人中学からの付き合いなんだって」

…。

「でも彰さんと恭介くんは幼稚園からみたい。私らと同じ」

あの日以来…そうあのファミレス事件の日以来。

なぜか沙希はアイツらの話題をたまに会話に盛り込んでくる。

もしかして…

「…沙希もしかして誰かと連絡取ってる?」

「うん、取ってるよ?」

「…彰くん?」

「正解っ！何？だめだった？」

「いや…全然だめじゃないんだけど」

むしろいい人だと思う。彰くんは。彰くんだけは。

「ちなみに今度ゴハン行くことになってるから」

「ふうん。まあガンバッテ」

沙希には悪いけど私には関係ない。というか関係したくない相手だ。

「5人で」

ぶっ！

何！？このコ今爆弾発言したよ！？サラッと！

「何で私まで！？二人で行きなよっ！」

関係ない私まで巻き添えにしないでくれ〜！！

「あ、恭介くんだけでいい？4人にする？」

「はああ！？」

意味わかんないって！何でアイツ！？摩訶不思議！！

「だってナンパしたんでシヨ？」

ニヤリと笑う沙希。その顔不気味っ！

「…だあかあらあ！あれは私じゃないって
「なあってね」「ば…！！？」

「嫌いだもんねナンパ。それに杏のタイプとは違うみたいだし」

さすが幼馴染みっ！わかってらっしやる！！さっきの冗談は水に流そうっ！

と、思ったのも束の間…

「でも5人で行くのはやめないから」

がーん。

「何で！？？どうして！？？why！？？」

「あのね…杏は私の親友よね？」

右人差し指で私の鼻先をツンと指す。

「…それが何よ?」

「親友の恋を応援してこそ親友つてもんでしょ?ね?ね?」

「…どつちやら切っても切っても…切る事は許さねいらしい。」

第八話 呼び名はホームドラマ？

「親友の恋の相手の親友とは友好関係を保つべし」

…沙希がこんな御触書を出してから数日。

確かに言ってる意味はわかる。わかるよ？でもね？

思っても出来ないっていうのが人間ってもので…

「はぁ…痛っ！」

大袈裟なため息をついた私の頭を沙希が小突く。

「ため息禁止。スマイル0円をお願いします」

「…そんなマリア様みたいなこと出来ません」

「あ、沙希ちゃん。こっち〜!」

待ち合わせ場所…例の悪夢のファミレスに足を踏み入れると、彰くんがさわやかな笑顔でこちらに手を振っていた。

「ごめんね!遅かった?」

沙希も笑顔だ。ほんわか空気が漂う。

…その一歩先からは闇だ。闇が広がっている。

「何ブツブツ言ってるんだ?座れば、杏ちゃんも」

はい???下の名前+ちゃん???

「…私名前言いましたっけ?」

「彰に聞いた。立花 杏ちゃん？」

「杏ちゃん…ってやめてくれない？あのホームドラマ思い出す」

「同じ屋の下？」

はい。珍回答。

「…ひとつ 根の下だろ」

出ました。灘波 慶のツッコミ。

「まあ座れよ。ん、メニュー」

「どつも…」

何か変な図だ。私と沙希が右側。3人が左側。

沙希と彰くんは端で向かい合って二人の世界。

…残された3人。何だこの異様さ。

「杏、お前決めた？」

「ちょっと…！何で呼び捨て…！？」

「あ？”チャン”嫌なんだろう？」

それはそうだけど…他にもあるでしょ！上の名前が！

「別に俺も呼び捨てでいいし。タメだし。問題ねえだろ」

…どんな理屈ですか！？

「ちなみにこっちも”慶”でいいし。んで、何？決めた？」

「…アイスティー…レモンで」

…何だかわからないことになった。

…私がコイツらを下の名前で呼び捨てにすることなんか…ないですよ。

第九話 恋の相手の親友の応援Ⅱ成就の秘訣

嫌でも時間はたんと過ぎてゆく。

相変わらず端の二人は終始笑顔でトーク中。

こちらはといえば…まあ。相変わらずです…

「お前ら高校からの友達？」

少しの沈黙を破ったのは水嶋恭介だ。

「違う。幼稚園からの幼馴染み」

「へえ、長いじゃん。俺と彰と一緒にだわ。ちなみに慶は中学からだけどな」

知ってますよ。沙希情報だけど。

「珍しいね。男同士高校まで一緒って」

私はアイステイーをストローでかき回しながら言った。

「そうか？まあ、そうかもな」

チラリと目線を上げると、灘波慶は頬杖をついて無表情だ。

…話聞いてんのかな？

「…あいつらどこが緊張してんだ？」

って、急に喋り出さないでよっ…！

私は慌てて目線を外した。

「確かに。完璧二人の世界」

…同じくそう思う。つーか沙希そんなキャラでした？

「…何か人懐っこそうだね。彰くんって」

「かもな。人見知りとかしないタイプだし」

コイツら本当に仲いいんだ。お互いわかってるって感じがする。

「あ、お前携帯ドモ？」

は？

「何使ってる？ちょっと出せ」

いや。意味わかんない。

…なぜか水嶋恭介は手を出している。

「もしかして持ってない子？金銭的？」

はいいい！？

「持つてるわよ！ホラっ！」

バン、とテーブルに携帯を差し出した。

出した途端にアイツはピッピッ、と私の携帯を操作している。

「ちょっと…！何してんのよ水嶋恭介っ！？」

「こっちにも色々あるんだよ。親友の恋の応援に相手の親友の手助けは必須」

ん？どこかで聞いたようなセリフ…

「てか何でフルネームなんだよ。」恭介”でいって言うてんだろ」

そう言いながらアイツは私の携帯をひょいと投げた。

…絶対に呼ぶことはない

…絶対に！

第十話 役に立たない情報

「彰が沙希ちゃんに近々告る予定。悩んでるようならフォローよろしく！」

アイツからこんなメールがきたのはあれから数日後。

「ぎゃあ！」

思わず見た瞬間携帯を落としてしまった。

良かったトイレとかに落とさないで。

…でも嬉しいかも。沙希も最近楽しそうだし
「何て見んの？」な…！？

「メールかあ。…あ
」

マズイ〜！！沙希に見られちゃ意味ないじゃん！！

「あ、あのね沙希っ！これは…えっと
」

人ってこういう時慌てて墓穴掘るんだよね！！え〜と…どうしよー
！！

「そのメール誰から？」

ん？沙希は意外と落ち着いている…

「…水嶋恭介」

冷や汗ダラダラながらも沙希の質問に答える。

「恭介くん？あれ、杏、恭介くんと連絡取ってるの！？」

えー！驚くところそこじゃないでしょー！！

「ええっと…そうなんだけどそうじゃないっていつか…」

沙希を洗脳するためだとは言えない…

「でもそのメール意味わかんない。私もう付き合ってるよ？彰くん
と」

え。

「ええええ！知らないよ私！いつの間につ！？」

「んと3日前かな。告白されたのはその日」

沙希は嬉しそうに言っ…とりあえずおめでとっ。

で…。

いつの情報だああ！！水嶋恭介っっ！！

全然役に立ってないですから！！

沙希に何も聞かなかった私も悪いけどさ…

「でも驚いた。杏と恭介くんってそういうことだったんだあ」

満面の笑みを浮かべる幸せ絶頂の沙希

…残ったのは大きな勘違いが一つ。

第十一話 意外な言葉

立花杏。

17歳と2ヶ月。

突然ですが今迷ってます。

…原因は私の目の前で鳴り響く現代機器。

ディスプレイには”恭介”の文字。

…言っときますけど登録したの私じゃないですから！

こうやって登録されてることも今日始めて知ったところだし…

いつもなら出ない。出る理由がない！

でも…文句の一つでも言ってやりたい！！

「役立たず」

ボソツと呟くと着信が切れた。ホッ…

安心したのも束の間。2秒待たずと再着信。

「…出るか」

私は観念して通話ボタンを押して耳にあてた。

『あ、おれ』

…俺でわかりたくいがかかってしまう。名前出てるし。

「…あの、アンタに言いたいことが」

あの二人はもう付き合っていました。手助けも要りません。従ってあなたの番号も必要ありません。

そう言っただろうとすると、電話越しに意外な言葉が聞こえた。

『悪い』

…え？

『あの二人もう付き合ってたってさ。俺聞いてなかったし。お前聞いてた？』

ちょっと驚いた。素直に謝るようなタイプじゃないと思ってたし…

「…ううん。今日聞いた」

『何だそつちもか。彰に聞いたら”あれ、言ってなかったっけ？”って。』

天然もいいとこだよな」

「…ぽいね」

文句言うタイミング逃しちゃったかも…

『結局俺ら何の役にも立ってねえじゃん？笑える』

「…一緒にしないでよ。そっちが勝手にやったんでしょ」

『その発言かわいくないよ杏ちゃん』

「杏ちゃん言うなっ！」

『ま。とにかく良かったってことだ。円満円満』

「…まあね。沙希も嬉しそうだったし」

『悪かったな、電話して。んじゃあな』

「あ…！」

プープー。

…勝手に掛けてきて勝手に切るなよ。

「あなたの番号消すから」って言えなかったじゃん。

第十二話 ドストライクorボール

授業の間の最大の休み時間の昼食は待ち遠しい。

お弁当は冷めても美味しく思えるから不思議だ。

「いただきます」

昼食を始めて2秒。沙希がまたもや爆弾を落とす。

「杏と恭介くんってどうなの？」

ポロ。

その瞬間挟んでいたから揚げがお箸から落ちる。

メインのおかずが一つご臨終に…ってそうじゃない！

「何？動揺してる？」

「してないわよっ！何？何の話してるの！？」

声が少し大きくなってる気がするけどこれは動揺ではない。決してない。

「ん〜、どうなのかなって思っで。興味本位？」

沙希はパクツと玉子焼きをほお張る。

「興味本位で人をどうにかしないでよっ。よりもよって水嶋恭介と！」

「あっ！私のハンバーグ」

沙希のお弁当箱からメインのハンバーグを盗み食い。

から揚げの恨みは恐ろしいぞ。

「だいたいね、私のタイプとか離れてんのっ。沙希が一番知ってるでしょ」

「知ってるよ。でもそんなの常にあてはまらないもん」

「それって彰くんのこと？」

「ううん。ドストライク」

… ああ、そうですね。

「ま、違ってるというならいいけどさあ」

だから違ってる。ボールもいいところだ。

「まあ彼女関係苦労しなさそうだよな。
何てったってあの容姿だし。モテるのは確かだもん」

… だろうね。そこは認めよう。あくまでも一般的に。

「気付いてた？一緒にファミレスいた時の視線」

「え」

「もっぴしぴし伝わってきて痛かったし。女は怖いね」

…沙希、あんたも女でしょ。それにしても

「全然知らない。何にも気付かなかった」

「…ま、杏は自分のことでも気付いてないからね」

沙希の失礼発言にはあとで制裁を加えるとして。

そんなの今の私には関係ないことだ。

もちろんこれからも。

第十三話 女の敵

放課後のファミレスは学生の集会場と化す。

色々な制服が並んでいてちよつと面白い光景だ。

この人の群れの中で私が一番不機嫌な自信がある。

「ね、これ何の意味があるの？」

私の問いかけに

「ええ？」とお間抜けな顔で答える沙希。

一言で説明すると…5人。

「デートなら二人ですればいいでしょ？」

というか普通はそういうものだと思っただけ。

「デートならね。今はそうじゃなくて遊んでるだけ。遊ぶなら人数多いほうが楽しいでしょ？」

「立花さんもしかして何か用事あった？」

心配そうな目でこちらを見る。

彰くんはやっぱりいい人だと思う…。

私のことは沙希を気遣って名字で呼ぶし。

「デートは別の日ってか？」

話に割り込んできたのは水嶋 恭介だ。

「うん。俺たち毎日連絡取ってるもんね！」
「ね〜」

…バカップルは何を言っても無駄らしい。

「…暑苦しい」

灘波 慶の一言には威圧感があるから不思議だ。

「俺にも予定つてもんがあるんだけどなあ」

「そうなの？でも恭介ヒマそうだけど」

「ん〜。丁寧にお断りしてるからね」

「そうなんだ。道理で最近見ないと思った」

「…見ない方がいいだろ。あれは」

…何の話だ？…3人は会話繋がってるし

「何で断ってるの？」

うん！？沙希も？…わかってないの私だけ？

「お姉さま方怖いし。あとあと面倒だしね〜」

「うっわ…女の敵」

「違つよ沙希ちゃん。恭介は…」

…別に入りたくもないけど自分だけ論点がわからないのは虚しい。

「あれえ？恭介くん？」

私が嫌いな普段より2オクターブぐらい高いだろっ！という声でした。

振り向けばそこには化粧の濃さと制服が見事にミスマッチした女子高生。

「なんか久しぶりだね？今度は遊ぼうねっ！」

この言葉で私の中のバラバラだったピースが一致した

女を粗末に扱うような男は最低だ。

第十四話 止まらなかったんだ

別にアイツが女の敵だろうと

アイツがあとでどんな痛い目に遭おうとどつでもいい

でも

女の口をそういう風に扱うのは許せないっ！

「噂をすればだね」

まず最初に言ったのは彰くん。

「…ナイスタイミングだな」

…そんなツツコミは要らないよ灘波 慶

「あの人はそうでもない。サツパリしてる人だし」

笑いながら言ったアイツ…ふざけんなっ！！

「ちょっと水嶋恭介っ！あなた一体何様のつもり!？」

一気に言い放った私を見て、沙希は呆れたような顔をしている。

「何様って…別に」

「だいたいあんたみたいに女の口を下手に見て粗末に扱う奴がいるから、バカな女だって増えるのよ!！」

あれ？ちょっと言ってる意味自分でもわからない。

「た、立花さん…落ち着いて座って」

「ごめんなさい彰くん。止められそうにありません。

「女がみんな軽いみたいに思われるのっ!このスケコマシッ!！」

あ。言っちゃった…

「…古」

…ありがたくないよそのシッコミ。

「杏。あんたここどこだかわかってる？」

…そうでした。公衆の面前、学生の集会場…ファミレスです。

チラリと水嶋恭介を見ると無表情…だけどオーラは黒い。

「…言いたいことそれだけ？」

その言葉に私は何も返せない。

「あほらし。帰るわ」

「あ、恭介っ！」

彰くんの制止もむなしく店を出て行った。

「…ごめん、空気悪くしたね」

謝ろう。あいつにはともかく…この場は私が悪い。

「…杏、言い過ぎだよ」

…わかってる。でも止まらなかったんだよ。

ストーン。

黙り込んで座った私を見た彰くんが口を開いた。

「…立花さん多分。誤解してるよ恭介のこと」

…誤解？

このあと…強烈な罪悪感が生まれた。

第十五話 アイツのこと

「恭介は自分から声かけることはしない。

向こうから勝手に来るんだ。恭介の外見目当てで。

恭介は波風立てないように断ってるんだけど…中にはそれだけじゃ聞かない人もいるし。

恭介はああやって笑って言うけど、俺から見たら被害者だよ。

俺は幼稚園から恭介を見てるけど、さっき立花さんが言ったようなことは絶対ない。」

どうしよぶ。

彰くんが言ってることは本当なんだと思っ。

嘘をついてるようには見えないし、ついてると思いたくない。

これを聞いてしまった私はどうするべきか…

そんなの簡単だ

謝る…：しかないのはわかってる

「あんまり気にしないで。曖昧な言い方したのは恭介だし。今度会うときはケロっとしてるよ」

彰くんは笑って言ったけど、どのツラ下げて会えば…

「電話すればいいじゃない。知ってるんでしょ？」

かるく言ったのは沙希。

それはそうかもしれないけど…

「んなの無理。この前出るのにも気引けたんだからっ…！」

「…ふうん。恭介が電話ね」

…墓穴を掘った私。

あれはただの…業務連絡だ。

ていうか、そんなとこツツコまなくていいよ灘波 慶！

…今日は厄日かもしれない。

まあ私が悪いんだけど…

携帯電話を握り締めながらそんなことを思った。

第十六話 イタ電？

人が嫌がる事はしちゃだめよ

もしも、してしまったら素直に謝りましょうね。

この言葉を子供の頃に言われた人は多いはず。

…出来れば苦労しないっつーの！

あの後、解散して現在自宅の自分の部屋。

あはは、勘違いしてた。ごめんね！

…なんてテンションで謝るのも変だし

ごめんなさい本当に私が悪かったです！何でもします！

…っつても違うし。

ごめん。ってただそれだけ言えばいいんだけど…

でもそれで私がアイツに言った言葉が消されるわけじゃない。

…自己嫌悪。

ってこんなの考えてたら永遠のループだ!!ドツボにはまる!!

「てやあツツ!!」

通学カバンから勢いよく携帯を取り出す。もちろん検索行は「力行」だ。

とにかく普通に謝る!じゃなきゃ熟睡も出来ないっ!!

ピッ

勢いよく電話のボタンを押した。

無機質な呼び出し音が響く。

…。

一定のリズムで続く。

…出ない。あからさまに拒否られて

「ピッ」

ネガティブ思考に向つ寸前、呼び出し音が消えアイツの声がした。

『はい』

スキ。

『まっまっまっ』

ドキッ…とはしたけどこれは驚きの擬音ですからっ！…あしからず！

『…何？番号通知してるけど新手のイタ電？』

違うしっ！…って何から言えはいんだっけ…えっと

『おーい、杏ちゃん』

「杏ちゃん言うなあ！！」

第一声で怒鳴ってしまった

…反省。

第十七話 仲直りする仲

人間って生き物は、想定外のことが起こると頭が真っ白になる。

…え？私だけですか？

それもそのはず。
だってアイツがあまりにもいつも通りだから。

『お前そうとう嫌なんだな。ツッコミ早すぎ』

アハハ、と電話の向こうでアイツは笑っている。

…笑ってる？何で？
あんなこと言われて…なんで笑ってるの？

『聞いてんのかよ？ダンマリして』

「あ…えっと。小学校時代のあだ名で…さらに同じクラスに小雪ち

やんって子もいて…」

あれ？私何の話してんだ？

『マジ？実写版出来そう』

既に実写版だし小学生じゃ無理…って違おう！！

「あのさ…今日さ。私があんたに言ったことなんだけど…」

『…ああ。何？まだ言い足りない？』

「違うよ…。その、つまり…じゅめん」

少しの沈黙、のち

『…気味悪い』

かちん。

「ちょっと！人が謝ってんにの”気味悪い”って!？」

何コイツ!?意味わかんない!!

『あ、そうじゃなくて。やけに素直なもんで』

…ああ。地味に納得。

「その…あれよ。あんたの素行を勘違いしてたというか…」

『…彰に聞いただろ?』

「はい。ソウデス」

やけに丁寧語になってしまっ。

『彰は俺のこと多分かなり美化してるぞ？実際この顔利用してバンバン遊んでるかもしれねえし』

「…いいよ別に見栄張んなくて」

何となく嘘だと思った。理由はわからないけど。

『…っーかお前”スケコマシ”って古すぎ。いつの時代だよ』

うるさいよその人。本人だってわかってます。

『…ま、俺も大人げなかったっーことで。これって仲直りっっーの？』

「私とあんた直すほど仲良くないし」

素直な女の子って私には無理みたいだ。

…そんな必要今のところないけどね。

第十八話 招待券と交換条件

夏の日差しが弱くなり

秋の過ごしやすい気候になり始めた今日この頃。

「はい、これ」

薄ピンク色の紙をひらり一枚。沙希が私に手渡した。

何コレ？とにかく読んでみよう。声に出して。

「北高文化祭来る…は？」

「読んで字のごとく。ってなわけで今週土曜ね」

…ええ！？

「何で私もなの！？」

「だって彰くんクラスの店番もあるし、ずっと一緒に回れないもん」

「そ…そりゃそうかもしれないけど」

「それに5人で会うの久しぶりでしょ？」

そう。あの謝罪の電話以来会っていない。

もちろんだけどメール、電話なんて用もないからしないし来ない。

「ってなわけでよろしく」

…まあいつか。楽しんじゃえば。

「ちなみにその招待券。恭介くんのだから」

うん？

「北高文化祭って、生徒の招待券なきゃ入れないの。」

私は当然彰くんのも。で、親とかにあげたらなくなっただって。

だから、それは恭介くんの。」

なるほど。そういふことね。でも…

「アイツもばらまく数多そうじゃない？」

「恭介くんが女の子誘ったら変に勘違いしちゃうでしょ？」

「あー…うん。そうだね」

それこそ本人にしたら最悪だ。世の中勘違い女多いし。

「本当は慶くんのとどっちでも良かったんだけど、その券と交換条件だって…」

「…交換条件出されてまで私行きたくない」

簡単だってば、と笑う沙希は次の瞬間こう言った。

「壁」だってさ

…アイツ。人を壁呼ばわりかいつっ!!

んで壁って何!?

第十九話 トドメのたこ焼き

壁：空間を仕切り区画を形成するために設けられる、垂直方向に立つ構造物である。

以上、

「壁」に関する知識でした。

思わず調べてしまった自分がアホらしい。

…考えないことにしよう。

屋台の匂いに老若男女様々な人々。

北高文化祭は昨日と今日行われ、今日が最終日だ。

「沙希ちゃんどこ行く?」

「んっと、彰くんのクラス行きたいな」

「了解」

…ここでもバカップルぶりを大いに発揮している二人と、その二人の少し後方を歩く私。

…完璧邪魔な人だ。

「ここがウチのクラス。たこ焼きなんだっ」

「あ、おいしそう！」

…本当。おいしそう匂いがする。

「自分のクラスだからって割引しねえからな」

ん？

「恭介ケチ。いいよ払うから」

よく見れば焼いているのは頭にタオルを巻いた水嶋恭介だ。中には灘波慶の姿も見える。

「あれ？三人同じクラスなんだ？」

私も同じこと思ったよ沙希。

「そっだよ。すごい偶然でしょ」

偶然なのか！？…って私と沙希も同じクラスだけどね。

「杏、お前もいるんだろ？」

「うえ！？あ…じゃあもらっつ」

久しぶりに名前で呼ばれたからびっくりした…！！

「慶。具取って」

「ん」

見事な連携プレーで丸型に具を落としていく。

出来上がったたこ焼きはお世辞にもプロ級とは言えないけど、文化祭らしい味がしておいしい。

「おれそろそろ時間終わるから抜けるぞ」

水嶋恭介が灘波慶に言う。

返事はないけど伝わってるんだろう。

そんなことを考えていると、水嶋恭介がこつちを見て一言。

「たこ焼きと招待券の礼。きっちりしろよ?」

…あ!そういえば私お金払ってないっ!!--もう食べちゃってるし!!--

「壁”よろしく”」

だから壁って何!?

このあと私は違う

「壁」の意味を知ることになる。

第二十話 壁の役割

ちよつと…いや、かなり忘れてたけど

今私の隣にいる人は容姿端麗なヤツだった。

容姿だけね！ここは勘違いしないで下さい。

「じゃあ私達二人で回るからっ
」

語尾に がつくぐらい楽しそうな沙希が度々爆弾投下したのは数分
前。

はい。ここから回想シーン入ります。

「…えと、彰くんの店当番は？」

最もな疑問だ。そのために私は来たようなものだし。

「俺なら昨日終わったよ？」

え…？二人して爆弾投下しないでよ。

つて、ええええ！？

「じゃあ私は！？意味もなく拉致られたわけ！？」

「ごめん。私もさっき聞いたのよ」

沙希さん！！そういう連絡事項は忘れないでよっ！！

はいカット。

…というわけで私の隣にいるのは水嶋恭介一人なのです。

何でやねん！！ツツコミ要員希望！！灘波慶を希望しますっ！！

…っ取り乱してもしょうがない。

一旦落ち着こう。深呼吸だ。

「まあしょうがないな。あいつらも二人で回りたいたろっし」

…わかりますよ。ええ。わかりますとも私だっつて。

なら私を呼ぶなよ！…ってなもんで。今さら遅い。遅すぎるけど。

それと私にはさっきからわからないことがもう一つ。

「…ねえ水嶋恭介。”壁”っつて何よ？」

場合によっちゃあ放棄だ。食い逃げ上等！

「ん？簡単なこと。俺の隣に立っててくれればいいから」

え？それだけ？？

「とりあえずはぐれない。わざと離れない。これが条件」

…何だ。意外とあっけない。隣りにずっといるのは考え物だけど

とりあえず一安心。”壁”なんてネーミングつけるなよ。

「さっそく役割果たしてもらって助かってマス」

ん？役割？まあ確かに隣に立ってるけど…

「…お前もしかして鈍い？あのイタゝイ視線に気付かない？」

そういえばさっきから見られてるよつな…

振り返って後悔。見渡してさらに後悔。

私はその時に悟った。

”壁”は壁でも、迷惑女対策の”防壁”。だと。

第二十一話 威力は2倍

防壁…敵の侵入や火災・風雨などの害を防ぐ為に設けた壁

以上。

「第二回 杏のワンポイントレッスン」でした。

つまりこの場合、敵〓迷惑女。壁〓私。である。

…人を壁要員にしたことも腹立たしい。

でも。この壁じゃ何も防げませんけど？というのが正直な感想だ。

「成功。かと思ったけど人選ミスみたいだな…」

そうでしょうね。もろくも崩れ去りますよ。ボロボロっと。

…あれ？何で私がこんなに自虐的にならなきゃいけないんだ？

あちゃあ、というポーズで額を押さえる水嶋恭介。

そして一言。

「視線2倍になってる」

2倍？どういう意味？

顔に出てたんだと思う。私の顔を見てアイツはド失礼発言をした。

「…お前やつぱ鈍い。それでよく今まで過ごしてきたな」

…帰ろう。何だか知らないけどここに居て得する事はない。

「役に立たないみたいなんで帰り…」

「教室戻るか」ます…は？」

最後まで言い終わらないうちにアイツが言った。

「とにかくここに居たくないし。はい退散」

ちよつと…！え、私も！？って何！？なぜか手首掴まれちゃってま
すけど！？

そんな私とは裏腹に水嶋恭介はどんどん進んでゆく。

「何！？勝手に拉致らないでよっ…！」

ていつか速いつ…！私も必死で歩いてるのに…息切れしそうだっ…！

「アホか。お前あんなところで一人でいたら面倒くさいことのオンパ
レードだぞ」

オンパレードなあ！？…今でも十分つ面倒くさいつちゅーの…！

声に出して言いたいの息が切れてて言えないっ!!!

それでも止まる様子なくひたすら早歩き。

あなたの足と私の足のコンパスってものを考えろっ!!!!!!

第二十二話 好意と好奇と敵視

喫茶店でお茶

って普通は仲がいい…つまり会話が弾む人としてこそ楽しいものですよね？

まあここは喫茶店じゃなくてごく普通の教室ですけど。

「杏、お前アイステイでいいよな？」

コクコク。息が完璧にあがってしまった私は頷くのが精一杯だ。

全力で競歩をして戻ってきたのはアイツのクラスのたこ焼き屋。

教室の半分がお客様用席。もう半分が調理場&クラスメイトの休憩スペース。

その休憩スペースの椅子に机を一つ挟んで座る私と水嶋恭介。

…ちょっと居づらい。当たり前だけど知らない人ばかりだし。

「暑っ。今日天気良すぎ」

そう言いながら一気にコーヒーを飲み干した。

私もそろそろ息も整ってきたので、目の前に置かれたアイスティーに手を伸ばす。

渴いた喉に水が流れ込む。ふう。落ち着いた。

…ちとっ。

「一体何なのよ？私競歩しに来たわけじゃないんだけど」

まずは嫌味をたっぷり込めて言ってやった。

「だからあの場所に居たら声掛けられるって。先輩方に気い使うのも疲れんの」

そこはわかる。外見だけは人並み以上だし。

それにハーフってだけで寄って来る人もいるみだいだしね。

「で、私の壁が役に立たないって？冗談じゃないわよ。勝手に人を壁呼ばわりして」

こっちだってなりたくてなるわけじゃないのよっ！！

「役につつーか…そこは問題なかったけどな。問題は副作用。好意と好奇と敵視の目線。さすがにキツイわ」

好意と好奇と敵視？

…だめだ。意味わかんない。

「あー。お前その顔わかってないだろうな」

失礼な！！…その通りだけど！

まあいいや。二人で外出たいわけじゃないし。ここで座ってる方が
楽だし。

「…招待券と交換条件なんてあんたもセコイよね」

この場合、意味はなくしちゃったけど。

「簡単に渡したら面白くないだろ？」

どっちにしたって面白くないんですけど…！

「…あんた絶対一人っ子でしょ？」

「残念。妹がいます」

勝ち誇ったような顔をするアイツ。

別にこっちは負けたなんて1ミクロンも思っていないんですけどね。

…でもなんかムカツク。

第二十三話 フルネーム

教室中にたこ焼きの匂いが漂っている。

みんな一生懸命だし楽しそうだ。

そういえば沙希と彰くんはどこ回ってるんだろう。

そんなことを思っていると後ろから声が聞こえた。

「恭介、作戦は失敗か？」

カタン。と音を立て、水嶋恭介の隣に座った灘波慶だ。

「思わぬ誤算が生じてな。緊急避難中」

「お前を探して来た奴が何人かいたぞ。ま、いないってわかったら消えたけど」

「そりゃ良かった。で、慶は堂々とサボリ？」

「休憩中」

「あっそ」

変な感じ。灘波慶がちゃんと話してるのって初めて見たかも。

「避難はいいけど。お前ら裏入ってきてからすげえ見られてるぞ」

何???

「あー。クラスの奴だろ？それぐらいなら許す」

勝手に許すな！！って本当だ見られてるし…！！

「どついう関係か聞くから”壁”だって言っただけだ」

「ちょっと！灘波慶まで壁って言わないでっ…！！」

「…フルネームかよ」

おお。はにかむように笑った！激レアかもしれない。

「…じゃあ灘波くん？灘波？慶くん？慶？」

「え…」

どれがいい？って聞こうとした一瞬。

灘波慶が驚いたような表情を見せた気がした。

「えっと…じゃあ”慶くん”でいいっすか？」

だから私もなぜか変な体育会系の話し方をしてしまった。

「どつどつ自由に」

と言った顔はすでにいつも通りの表情。

…私の思い過ごしかな。

「お前さ何で俺はフルネームなわけ？」

「嫌いなタイプだったか…ら」

あれ？私何で過去形？

「…それケンカ売ってんのか？」

あんたに売るケンカなんてないし…っっていうか

何で？いつから過去形になったの…？

第二十四話 例の言語

身長之差が約20cmだとすると、足の長さの差は約10cm。

10cmの差が大股で走ることにより1歩につき15cmに開く。

そんな二人が全力疾走で数十m。

…ついていけないわけじゃないでしょうかっ!!

冒頭から意味のわからない話ですみません。

状況を説明しますと、とりあえず走っています。

さかのぼること1分前。

”過去”と対峙する私の思考を遮るトデカイ声。

「あつ。今何時!？」

「2時10分」

「やばい10分遅れてる。おい、ちょっと来い！」

は？

気付けばまた手首を掴まれていた。

そして理由もわからないまま走らされている今。

この時点で私はすっかり過去との対峙を忘れていた。

…だからついていけるわけないってば!!!

息を切らしながらもなんとか着いたのは正門前。

何なの！？とか、いきなり走るな！！とか

言っでやりたいけど悲しいかな息が切れてて上手く話せない。

「いた。恵麻！」

エマ…？

「恭介っ！遅いよっ！」

恭介？…って何あの美少女！？見るからにハーフ…あ。

「さっき言ったる？これ俺の妹」

…この兄にしてこの妹あり。美形兄妹である。

まじまじと顔を見ていると美少女はあの言語を喋った。

「Who are you? (誰?)」

Are you friend of the my brother?
(兄の友達なの?)

目が好意的ではない気がするのは…気のせいだろう。

しかもさっき日本語で喋ってましたよね。

…明らかに兄妹だ。

第二十五話 美少女は××××

人は、してやったり！と思うことに思いもよらぬ答えが返ってきた時、異常に驚いた反応を見せる。

目の前の美少女は今、ちょうどそんな感じだ。

「Nice to meet you. (初めまして。)
I'm Ann Tachibana of his acquaintance. (私は彼の知り合いの立花 杏です。)」

にっこりと笑って、”知り合い”を強調しつつ答えたらこうなった。

「…恵麻ムダだぞ。杏は帰国子女だから」

水嶋恭介にそう言われると、美少女はまじまじと私を見てきた。

う…何か緊張する。

「ごめんなさい驚かせて。私は妹の恵麻って言います」

今度は日本語で挨拶をしてくれた。多分根はいいコだ。

「悪いな。こいつちょっとブラコン気味なんだよ。

会った俺の友達はず先これ言っし。ま、悪気ないから」

「ちょっと！私ブラコンじゃないってば！！」

ブラコンね。納得。

私がコイツの彼女候補とか思っちゃったわけだ。

「去年の文化祭知らせなくて後で言ったらもう激怒。今年はず絶対行くってうるさいから呼んだってわけ」

ふうん。ちゃんと”お兄ちゃん”してるじゃん。

「何歳？中学生だよな？」

「14歳中学2年生。…杏さん本当に兄の友達？」

…うん、知り合いね。

「彼女とかじゃないですよね？」

「全く違います」

私がそう答えると、恵麻ちゃんの顔は一転して明るくなった。

「よかった！もしそうなりそうなら止めておいた方がいいですよ？
恭介女癖悪いから」

本人は否定してたけど…この「相当なブラコンだ。」

「恵麻それ言うなって…笑えねえ」

水嶋恭介も妹には弱いみたい。

何だか笑える。

∴しかし目立つ兄妹だな。

これじゃあ”壁”もなにもあつたもんじゃないと思うんだけど。

第二十五話 美少女は××××（後書き）

タイトルの「××××」は、「ブラコン」が正解です（笑）恵麻は
恭介が好きみたいですな。

第二十六話 質問と視線

勘違い。

ってされると面倒だし、何度言っても信じない人っていますよね？

今まさにそんな感じです。

私の目の前にいる美少女。もとい恵麻ちゃん。

彼女が食べたい。と言った一言により、今、甘味喫茶にいる。

あ。もちろん文化祭の出店の、です。

「杏さん、恭介と同一年ですか？」

「他校ですよねその制服。恭介とは同じ中学？」

「違っ？じゃあどこで知り合っただんですか？」

…なぜか質問攻めにされています。

やっぱり超ド級のブラコンだよ！！

私を見る目が明らかにまだ疑ってるしっ！

「ええと最初に会ったのはあ…」

答は海。でもこの答は言いたくない…

「杏は彰の彼女のトモダチ」

ナイスフォローー水嶋恭介っ！嘘じゃないし！！

「そっなの？じゃあ今日初対面？」

…こ、答え辛い。

「ってわけないか…呼び捨てだし」

わああ！恵麻ちゃん視線怖いですからっっ！！

「恵麻、あんま質問攻めするな」

水嶋恭介に言われると、恵麻ちゃんは

「はあい」と素直に返事をした。

ほっ。恵麻ちゃんの視線も和らいだ。

ううん。それより何か気分悪い。

全速力で走らされた拳句甘味喫茶でおしるこ…

「…水嶋恭介。私ちょっと外の空気あたってくる」

ごめんね、恵麻ちゃんはゆっくりしてて。と言い残し私は教室を出た。

…胃が重いつてこつこついう状態を言つのかな

ああ。水でも買いに行こつ。

第二十七話 いろいろありまして

お祭りで買う商品っていうのは

必ずと言って良いほど割高だ。

何でだろう。不思議だ。

「150円です」

微妙にコンビニより高いけど、今の私の気分がこれで晴れるなら安いものだ。

蓋を開けていざ飲もうとしたその時…

「一人？」

私の後方から声が聞こえた。

ん？

「それ中央高の制服でしょ？かわいいよね」

中央高…つまり私だよな？

「ええと…何ですか？」

「暇なら一緒に回ろうよっ！俺も今一人だし！！」

…わぁ。苦手なテンション！

「すみませんけど一人じゃないんで」

「こういつのはキッパリ断るに限る。」

「あ、友達？同じ学校？」

「は？」

「じゃあその子も行こうよ！俺も連れいるし！！」

さっき一人って言っただろ！！こっちは気分悪いんだからほっといてよ！！

もう一度キツパリハッキリ断ろうとしたその時

「おれの知り合いナンパしないでよ」

ん？この声って…

「何？この子彰の知り合い？」

「そう。お前の相手にはもったいないよ。残念だけど」

やっぱり彰くんか。隣には沙希もいる。

「このコには桁外れのカレがいるんだから。あんたじゃ役不足よ」

沙希…いくらなんでも彼氏の友達に暴言吐きすぎ。

って桁外れのカレって誰だ!?

「ってまさかアイツじゃねえだろうな!？」

だからアイツって誰!?

「ノーコメント」

コメントしてよっ!!わかんないじゃん!!

それじゃあ無理だ、とか何とか言いながら去っていく男A。

「立花さん一人？恭介か慶は？」

…ちょっといろいろありましてね。

第二十八話 偶然の一致

昨日は疲れた。

あのあといつもの5人+恵麻ちゃんの6人が集合。

言うまでもなく沙希と彰くんに怒涛の質問攻め。

彰くんは慣れていたようだし、沙希は何でも答える。

そして恵麻ちゃんは塾の為タイムアップ。ご帰宅した。

嵐が去ったかと思えば、今度は沙希がナンパ男Aの話を持ち出して

「一人で歩かせないでよ。危ないのわかるでしょ？」

と、水嶋恭介に突っかかっていく始末。

それに私が止めに入り、彰くんがなだめる。

慶くんは関心なさそうな顔で一部始終を見てるだけ。

たまにツッコむのは忘れずに。

ほら。もう自分で言ってもわけわかんないし。

…ま。思いの他楽しめたからよしとしようかな。

話は変わって私は今本屋にいる。

地元に必要な本屋がないので、学校がある駅だ。

定期あるから電車賃掛からないしね！

私は好きな作家の新作を手を取った。

この作家が好きになったのは死んだ姉の影響が大きい。

…今回はこういう作品かあ。

あらすじを読んだ私の隣から手が伸びて来た。

するとその手は私と同じ本を手を取った。

この作家好きなのかな？

私は一步横へずれながら、その手の主の顔を見ようと目線を上にあげた。

だって同じ作家好きな人がどついう人か気になるし。

「えっ？」

私の声に気付いたのかその人はこちらを向いた。

「あ」

驚くのも無理はない。

その人、とは昨日会ったばかりの灘波慶くんだった。

「…確か昨日も会ったよな」

…だね。

すごい偶然だな。

でも学校が同じ駅だからあり得なくもないか…

「…それ」

え？

「その作家…読むのか？」

「あ、これ？うん好きだよ」

慶くんは少し目を見開いている。

何？そんな驚くこと？

「…ふうん」

「慶くんもでしょ？新刊手に取るくらいだもんね」

「…あぁ」

…何だろう。表情がいつもと違う…？

「慶くん？」

「…お前見てると思ひ出すわ」

…え？何を？

「嬉しいような嬉しくないような…ってところかな」

あ、笑った。見るのは2回目だ…

「…それって誉めてるの？けなしてるの？」

さあね。と言って慶くんはレジへと向って行った。

もちろんあの本を買ったために。

…さっきのってつまり私が何かに似てるってことだよね？

人？物？

「じゃあな」

レジを済ませると私に向かって一言声を掛けて消えて行った。

うん、じゃあね。と言った私の返事は聞こえたんだろうか。

…何か不思議な人だな。慶くんって。

第二十九話 やっぱり鈍い

「それって新刊？」

私のカバンからひょっこり見えている文庫本を指して沙希が言った。

「そう」

「やっぱりね。まだカバーがきれいだもん」

「昨日買ったばかり。読み終わったら貸そうか？」

「ううん、いい。私読まないから」

沙希のこういうハッキリしているところは好きだ。

形だけの

「貸して〜」で、読まないで返す人より断然いい。

「それより土曜はゴメンね？思い出したら私ずっと彰くんといたからさあ」

そつだよね。私かなり放置プレイだもんね。

ま、そんなに怒ってませんけど。

「いいよもう。そりゃ誰だってカレシと回りたいもんね」

「さすが杏サマ。わかってらっしゃる」

「ケーキ食べたいかも。もちろん奢ってくれるよね？」

「…さすが杏サマ。ただじゃ転ばないヤツめ」

当然 もらえるものはもらわないとね。

「じゃあいつものファミレス…」

「の近くのアンティークな喫茶店」

「…ですよね」

「ん！やばいオイシイ！！」

季節のフルーツをふんだんに使ったフルーツタルト。

中のカスタードが甘さ控えめでバツチり私好みだ。

「ホント！こっちも絶品！！」

沙希はベイクドチーズケーキ。

ベリーソースと生クリーム。ミントの葉がアクセントになっている。

一通りケーキを堪能した後はひたすらお喋りタイムだ。

女の子は好きですよ。こっちはいいの。

「杏も彼氏つくればいいのに」

すっかり冷めてしまった紅茶を飲んでいる私に唐突な話題。

「…って言われてもねえ。作ろうと思って作れるもん？」

「どうかな？タイミングもあると思うけど。本人の気持ち次第でもある」

ごくろり。と沙希はカフェオレを飲み干す。

「私前から思ってたんだけどさ」

何よ？

「杏って帰国子女のわりに奥手だよな」

普通だよ。って前から思ってたの!？

「私恭介くんは絶対杏と合うと思うんだけど」

…だから何でここでアイツが出てくるの？

「少なくとも向こうは絶対嫌ってないよ。じゃなきゃ壁なんか頼まないし」

「…あのさあ。結局壁って何だったわけ？女避けてっていうのは分かったよ？でも大して威力のない私に頼むなんて一体どういうつもりだったんだろ…」

って、ん？何でそんなにポカンとした顔してるの？？

「…杏ってやっぱり鈍い」

かちん。

「それアイツにも言われたんだけど何！？私ってそんな鈍い！？」

「言われたの？他には何て？」

他！？他には…

「…視線2倍。とか…面倒くさいことのオンパレード。とか…」

思い出したらちょっと腹が立ってきたかも。

「ってことは恭介くんはわかってるってことだね」

え？何で納得？どこに納得なの？？

「ま、青春楽しめーってことよ」

…だめだ。沙希ちゃん暴走中。

第三十話 一生友達

人は悲しいことがあっても必ず乗り切れる。

時間が傷を癒してくれる。

…なんてキレイゴトをいうわけじゃないけれど

少なくとも私はそうだと思う。

少し肌寒くなってきた秋頃。

沙希が嫌な予感を感じさせる発言をした。

「遊園地行きたくない？」

「イヤ」

0・1秒の速さで瞬殺。

沙希の眉間にシワが寄るのが見えた気がするけどほっておこう。

「来週の土曜。1時。ワンダーランド」

「って無視!？」

「…人の話を聞こうよ。しかも二人で行って下さい」

「だってチケットもらったんだもん。4枚」

「4枚ってあと一人どうする気よっ!!」

「ん?来週の土曜?」

「…って何日?」

「15日」

「ごめん。その日は行けない」

15日は絶対譲れない大切な日。

「用事？先約かあ」

沙希はあからさまに、チツという表情だ。

…別にいいんだけどね。うん。

「その日はね、会いに行くんの。お姉ちゃんに」

そう言った瞬間、沙希の顔が少しだけ曇った気がした。

ばかだな沙希は。そんな顔しなくてもいいよ。

でも沙希らしいか…

「…そっか。優さん誕生日だっけ」

”優”と言うのは私の死んでしまった姉の名前だ。

フルネームは今井^{イマイ} 優^{ユウ}。

”今井”は母の旧姓です。

命日と誕生日。

その日は必ずお墓参りに行く。

父と母は知らない。私が決めたこと。

「うん、ごめん。無理には誘わない」

沙希は幼馴染みだからよく姉とも遊んでいた。

私の家庭事情をよく知る数少ない人だ。

「ありがとう」

私が今こうして笑って姉のことを話せるのは

そんな沙希の存在も大きな要因だ。

たまに暴走するし、自分勝手だし、おせっかいなところもある。

でも…

私は今こうして沙希と一生友達やっていくんだろっな。

第三十一話 コスモスの季節

柔らかい日差しが降り注ぐ。

秋晴れ。ってやつかな？

天気がいいと気持ちも穏やかになるから不思議だ。

「久しぶりっ。元気してた？」

前回来たのは夏休みが始まった頃。

その時も晴れだったから、私晴れ女かもね。

「はいこれ。きれいな色でしょ？」

姉が好きだったコスモスをそつと置いた。

「今季節だからかな？色んな種類あったよ」

手を合わせてそっと目を閉じる。

「…もうすぐ一年半だね」

姉が私の質問に答えるかのように、風が吹いて木々を揺らす。

その時、風に乗ってふわっとコスモスの香りがした。

「この種で辺り一面コスモスだらけになったらお姉ちゃんのせいだからね」

クスッと笑いを含めて言う私の鼻に違う香りがかすめた。

…あれ…この匂いって

辺りを見渡しても目には見えない。

どっ？

その香りを漂わせる花は姉のお墓の後ろ。

まるで日が当たらない場所にあった。

「…やっぱり。何でこんなところに」

…チョコレートコスモス。

違う…ちょっと赤っぽい。ストロベリーチョコ？

「…珍しい。初めて見た」

姉が死んでしまったからコスモスには詳しくなかった。

多分、市場にはあまり出回ってないと思う。

くん。と匂いを嗅ぐと、ほのかに甘い香りが広がった。

「…日に当たらないとすぐ枯れちゃう」

お姉ちゃんにだよね…？

持ってきたのイエローガーデンの隣にそっと生ける。

赤と黄色のコントラストが綺麗だ。

「…誰だろう。お姉ちゃんの友達？」

聞いてみても答えることが出来ないのわからない。

「コスモスが好きって知ってて…誕生日を知ってる人」

それに珍しい品種…

ストロベリーチョコの花言葉はわからない。

でもチョコレートコスモスは…

”恋の終わり”

コスモスにしては悲しい花言葉だ。

特に理由なんてないのかもしれない。

でも何だか…すごく気になってしまっ。

私は誰が持ってきてくれたのかわからないコスモスをしばらく見つめていた。

第三十二話 曖昧な空

「昨日、昨日はあんなに晴れていたのに

秋の天気は崩れやすっていうのは本当だな。

今日は朝からどんよりした空気だった。

「あ…雨だ」

教室の窓にポツポツと雨があたっている。

「うそお。私傘持って来てないよ…」

それはお気の毒…まあ私が入れてあげることになるんだろう。

この分じゃ花枯れちゃうな…

「ねえ沙希」

「うん？」

「花をね。人にあげるときって花言葉気にしたりする？」

「花言葉？うーん…そうだなあ。」

「相手が好きな花なら気にしないけど、選んであげる場合なら気にするかも」

「というか花はもらう側だし。と笑いながら答えてくれた。」

「そっか…じゃあやっぱり私の気にしすぎかな…」

「チョコ食べる？」

「ええ？？」

「好きでしょ？新作だよ」

「びっくりした…タイミング良すぎだっば。」

「一粒もらったチョコレートを口に入れるとほろ苦い味がした。」

「すみません。チョコレートコスモスありますか？」

「申し訳ありません。当店では取り扱ってないんですよ……」

「そうですか…ありがとうございます」

沙希と一緒に駅まで帰った後

私は一人、来た道を引き返していた。

さつきから雨は降ったり止んだり。曖昧な天気だ。

私はなぜか心に引つかかるチョコレートコスモスを買おうと花屋に寄ったんだけど…

「やっぱりないよねえ…しかもストロベリーチョコ」

…取り寄せなきゃだめかな

でもわざわざ？…一体誰なんだろう

そんなことを考えているとまた雨が落ちてくる。

「…帰ろっかな」

「結構濡れちゃったし…」

雨は止む気配をなくして強くなる一方。台風？って思うほどだ。

駅まではちゃんと傘を差して来たのに。意味ないじゃん。

その時突然に名前を呼ばれた。

「杏？」

え？

「やっぱり。って傘持ってたのにめっちゃ濡れてるし」

顔を上げたらそこにアイツ…水嶋恭介が立っていた。

「ダサッ」

…悪かったわね。でも何か今言い返す気分じゃない。

「…一人？いつもの連れは？」

「残念ながらいつも一緒じゃないんでね。そっちこそ？」

「…駅までは一緒だった…よ」

「ふうん…」

「お客様にアナウンス致します」「」

アイツの言葉を遮るように構内にアナウンスが響いた。

「現在豪雨と暴風の為、川沿いを通ります”西浦線”は運休となっております」

…ありえない。それ私が乗る線なんですけど。

落胆している私の表情を察したのか

「お前西浦？」とアイツに聞かれた。

力なく頷く私。…ほんと最悪だ。

「茶でもいけますか」

…は？

驚く私をよそに水嶋恭介は歩き出している。

「どうせ動かないんじゃないか」

…そうだけど。え？

「杏ちゃん早く」

だからいい加減それやめてってば…!!

第三十三話 距離感

私、なんでここにいるんだっけ？

目の前でコーヒーを飲むアイツ。

そして私の前にはいい香りの紅茶。

…なんで？

「ま、台風とかじゃないから適当に動くだろ」

「…そうじゃないと困るよ」

さっきよりは小降りになったみたいだ。

「ねえ、水嶋恭介も西浦線なの？」

「ううん…まあまあ」

…一緒だったんだ。知らなかった。

「…ツイてないなあ。真っ直ぐ帰ればよかった」

ふとこぼしてしまった何気ない一言。

「どっか寄ってたん？」

「…ちよっとね」

お決まりのファミレスよりも近いという理由で駅ビルの喫茶店。

洋楽が流れていて落ち着く感じだ。

「お前さ、何かすごい距離を感じるんだけど」

何？

「怒ってる時だけは普通っぽいけど。未だに俺の名前はフルだし」

「…そんなことはないよ、と思う。名前は言い慣れちゃったからだし」

そんなこと言われるなんて思ってもみなかった。

「俺は、お前は友達の彼女の友達、って遠いと思ってないけど」

え…

思わず真っ直ぐ目を見てしまった。

そうだった。この人は綺麗な色の目をしてたんだっけ。

「トモダチ」って思っのが普通だろ」

冗談でも大袈裟でもなく、あくまでも自然に言ったアイツ。

第一印象は最悪で…会いたくて会ったわけじゃない。

他人行儀だ、なんて思われてもいいはず…だけど

「チョコレートコスモス」

「は？」

「探してたの。でもやっぱりなかった」

「花？コスモスって今時期だろ？」

「そう。でも常時ある品種じゃないからね」

「ふうん。で、それがどうしたんだよ？」

「別に。ただ欲しかっただけ…」

…さすがに姉のことは言えない。

「何だそれ、意味わかんねえ」

フツとアイツは笑った。

こうして見るとやっぱり外国人っぽく見える。

「いいでしょ！アンタが水臭いみたいなこと言うから…」

変な空気だ。

アイツは笑ってる。私も嫌な気分じゃない。

「はいはい、悪かった。杏ちゃんは水臭くありませんよ」

「…ケンカ売ってんの？元はと言えば第一印象サイアクなアンタが悪い」

「第一印象？ああ、海か」

忘れてる！？物覚え悪っ！！

「俺は面白いヤツだ、って思ったけどな」

…どこがよ？こっちは全然面白くなかったのに。

”断って下さい”ってナンパされたの生まれて初めて

そう言いながらアイツは堪えきれずにまた笑い出す。

「当然でしょ。早く帰ることしか頭になかったんだから」

やばい、ハラ痛い。とさらに笑いが止まらない。

「あのね！そんなに笑うとこじや…！！」

「いいわお前。今までにないタイプ」

一瞬。

ほんの一瞬お互い目が合った気がした。

「世の中の女の子みんながアンタに言い寄ると思ったら大間違…

！！」

「お、雨止んだんじゃん？」

話すりかえないですよ！！って雨止んだ！？

「んじゃ行きますか」

「あっ」

らっつと伝票を持っていかれてしまった…

奢られても…困るっつてば！

第三十四話 さつとした優しさ

あのあとはちょっとした言い合いになった。

…はたから見れば相当バカな2人だったと思う。

「自分の分は払う」

「いらねえ」

二人ともこれの一点張り。

最終的に私がアイツのポケットに千円札を突っ込んだ。

ちょっと多いけどこの際どうでもよし。

さらに改札まで来た途端

「じゃあな」

…は？アンタもでしょ？と思ったら

「俺、東條線」

と言い出したもんだから絶句。

しかも私はもう改札を通ったところだった。

何で？東條線は止まってなかった…

なあんて思ってたらポケットを見るとというジェスチャーをしている
アイツ。

言われた通りポケットを探ると、アイツに渡したはずの千円札。

ニヤリ笑う水嶋恭介。

…やられた。

「今度絶対返してやる」

「え？何のこと？」

現在教室にて昼食中です。

「何でもない。こっちの話」

パクリとウインナーを口に入れた。

「そういえばさあ杏…」

ん？何だろっ？

「昨日カツコイイ外人サンと一緒にだったらしいじゃん？」

…何で私の情報筒抜けなんだろう。

「そつだね。たまたま会っただけ。で、どこからの情報？」

なんかもう驚くのも面倒くさいや。

「やっぱり恭介くんだったか。隣のクラスのコ。駅の喫茶店で見
たつてさ」

「ふうん。みんなヒマだね」

中身がなくなつたお弁当箱を片付けながらお茶を飲む。

…まさか改札前の出来事は見てないよね？

「だってあんた達目立つもん」

アイツが、ね。

「でもたまたま会ってお茶ってどついう心境の変化？」

「別がないよ。雨で昨日電車止まったでしょ？ただの時間つぶし」

「そういえば…二人とも同じ線なんだ？ん？杏が帰る時間止まってたっけ？」

そこは突っ込まないで。スルーしよう。

「それがさあ。アイツ東條線なんだよね」

「東條線？止まってた？」

「うっん…動いてた」

実は昨日から考えてたこと。

アイツは私と一緒に待ってくれたんじゃないか…って。

それによくよく考えると

私がアイツに持つる苦手意識ってなんなんだろう…って。

「杏？」

「あ、うん、でね…」

そしてお金のくだりまでを沙希に話した。

「そりゃ受け取らないよ」

「何でよ？奢ってもらう理由ないもん。逆に私が奢るべきじゃない

「？」

アイツが勝手にしたこととはいえ、仮にも一緒に待ってもらったんだし…

「そこは素直に」

「ありがとう」「って言えばいいの」

沙希は当たり前でしょ。と言わんばかりの言い方だ。

「でもそういついごとをやらってやっちゃうから変にモテちゃうんだろ
うね」

「うっん…」

「一般的に女の口はそういうのに弱い。杏は一般的？それとも例外？」

にっこり優しい笑顔で私に問いかける。

どうしてなのかわからない。

なぜか沙希の質問に答えられない私がいた。

第三十五話 嫌よ嫌よも…!?

外見だけで”好き”とか言ってるコは理解できないし

優しくされたからって好きになるわけじゃない。

「そういう点では私ってやっぱ”例外”なのかな？」

目の前で堂々と人のノートを写している沙希に尋ねた。

「はい？」

こっちを見ずにひたすらペンを動かしている。

…聞いてます？

「…だからこの前沙希が聞いたでしょ？私は”一般的”か”例外”かって」

「ああ。そんなのまだ考えてたの？」

おバカ？とさらに付け加えた。

…どうせバカですよ。

「それに、杏が一般か例外かなんてどっちでもいいしね」

ええ！？

写し終えたのかノートをパンと閉じた。

「つまり。恭介くんをどう思ったかってこと」

「…びびっ…っ」

字を書くという仕事を終えたペン先を私に向けてくる。

「最悪だと思ってたアイツが、意外といい奴で、チャライタイプでもなかった。」

間違いないよね？」

…うん。確かにね。

「しかもさりげなく一緒に待ってくれた。自分は関係ないのに」

…その通りです。

「で、よくよく考えたら何で私苦手意識あつたんだろう？みたいな？」

驚きだ。ここまで沙希がわかってるなんて。

私は目を見開いたままになってしまふ。

「さらにそのあとよ」

「あと?」

「恭介くんってモテるタイプだけど、それに乗っかる人じゃないよね?」

それに女の子の親しい友達には作らないんだと思う。誤解されても困るし、相手に悪いから」

「…そうかも」

「その恭介くんが杏にはどう?」

どう?…どう?って

「…普通?」

なぜか疑問形になってしまった。

「だよ。遠ざけたり壁作ったりしてない。むしろ好意的に見えるよ私には」

「…それって私が回りにいるバカ女みたいなタイプじゃないからでしょ？」

「それもあると思う。でも本当にそれだけ？」

「ってそんなの私に聞かれても…本人じゃないし」

「じゃあ杏の話に戻る。ぶっちゃけ気にならない？気持ち傾いたりしない？」

その言葉に一瞬フリーズ。

「杏の嫌いなタイプじゃないってもつわかるよね？」

「…それはわかるけど…でも、え？」

何だか頭が軽くパニックだ。

「それで少しも気にならないなんて例外通り越して女じゃない」

…そこまで言う？

「それに私の質問に方向は間違っても考えてたってことは

イコール恭介くんのこと考えてたってことでしょ？」

…そうなるの！？

「ま、嫌よ嫌よも好きのうち」って言うしね」

沙希の言葉に啞然・愕然。

それってつまり…

私がアイツを好きだったってこと…！？

第三十六話 かもしれない

そつえばすっかり忘れていたけれど

”嫌いなタイプだったから”と過去形で言ったことを思い出した。

あのあと考えようとして…色々あって忘れてたんだ。

私のタイプとは全然違う。

そのことははっきり言えるし

違うから！って否定はしてる…

頭の中でいろんなことがグルグル回ってる感覚だ。

「行くわよスノボ」

はいいいい!?!?

また唐突になにを言い出すのっ!

冗談でも笑えませんか!!!

「今度の連休。彰くんの親戚が経営してるロッジがあるんだって」

「…あっそ行ってらっしゃい」

こんな自分の心が不安定な状態で行けるわけない。

「ウエアとかあるから用意はいいって」

「…なんで私が行く前提で話してるの?」

「何で嫌なの?」

…うう。そう来たか

「…寒いし。別にしたくないし」

「でね、車も出してくれるって。朝早いんだけど…」

聞いたわりに人の話聞け〜！！淡々と話進めないでっ！！

「…私行かないからね」

これだけは絶対無理。何が何でも。

「…杏は別に好きじゃないんだよね？」

「当たり前でしょ…！！」

この言葉を何回言ったんだろうか。

沙希にはあれからずっとこう言ってるけど...

正直な話：自分でもわからないのが現状だ。

「じゃ行くよね？何も気まずいことなんてないもんね？」

「行くわよっ！！」

って、ぎゃあ！！私今何言った!？

「はい決まり」

にっこりご機嫌な笑顔の沙希ちゃん

…しまった。完璧のせられた

恨めしそうに沙希を見ているとチラッとこっちを見た。

…今から撤回しようかな

「あのね、杏。楽しもうよ?」

…楽しんでいるところが全く想像出来ません

「私ら来年3年だよ?そしたら旅行なんで簡単に行けないんだよ?」

「…だね」

そう言われればそうだ。遊んでいられるのも今のうちかもしれない。

「それに私5人だなんて言っていないよ?」

ん!?

「そつ…なの?」

「うん。今回は違う」

…何だ。

思わず「安心してしまった。」

ああ…

好きかどうかなんてわかんないけど

私やっぱり…意識してるのかもしれない

第三十七話 美少女再来

トンネルを抜けるとそこは雪一色の世界でした。

というナレーションがびったり合う窓の外。

車に揺られること2時間。

あと少しで目的地に着くらしい。

私はとにかく無の境地。

何も言わざる何も考えざる...

って何で私がそんな修行みたいなことしなきゃなんないの!?

その理由は本日のメンバー構成にある。

確かに沙希が言ったとおり5人ではない。

ただ、5人じゃなく6人なだけだ。

「杏さん何かブツブツ唱えてませんか？」

みなさんお察しの通り、5人とは例の5人です。

今喋ったのは私の隣に座る6人目の美少女。

超ブラコンの水嶋 恵麻ちゃん。アイツの妹だ。

「いいのほつといて。今情緒不安定なのよ杏は」

助手席に座っている沙希が振り向いて言った。

…誰のせいだと思ってんのよ。

はあ…

心の中でため息をついた時、運転席から声が発せられた。

「彰と沙希さんは付き合ってたのくらいになるの？」

運転手を快く引き受けてくれた彰くんの親戚のおばさんだ。

「えっと、まだ3ヶ月くらいなんです」

「そう。まだまだ楽しい時期ね」

「そりゃ、まだ2人じゃ旅行行けませんよねっ」

恵麻ちゃんはからかうように言う。

「…最近の中学生って怖いわあ」

…私も同感です沙希。

「で、杏さんは？どっちななの？」

「…はい？」

えっと…どつちという意味でしょうか？

「どつちもいい男でしょ？」

おばさんはあの2人に何度か会ったことがあるらしい。

っっておばさんまで何言い出すんですかっ！！

私は違います。って答えようとした時、声が被さる。

「どつちかって言つと慶くんだよね？ね？」

…最後の”ね？”にやけに力がこもってる。

…さすがブラコン。

「ふふ。恵麻ちゃんは恭介くんが大好きなのね」

「私ブラコンじゃないですよっ！」

自爆…誰もブラコンとか言っていないのに。

やや扱いづらいけど憎めないタイプだ。

ふと窓の外に目をやる。

少し前を走っているシルバーの車。

運転手は彰くんの親戚のおじさん。

つまり私たちの運転手のおばさんの旦那さんだ。

乗車人数は運転手含め計4人。

…どんな2日間になるんだろう。

第三十八話 何とかなる？

「はい。じゃあこれが女子ロッジの鍵ね」

おばさんはデザインが凝っている鍵を沙希に渡した。

キッチン、暖房、お風呂、トイレ

設備がばっちり整っている広めのログハウスだ。

「ありがとうございます！運転もお疲れ様でした」

「いいのよ。男子ロッジは隣ね」

もちろん。もちろんのことですけど男女別のロッジだ。

「はい、杏。ウヘア」

「ん、ありがとう」

至れり尽くせりだなあ…

「恵麻ちゃん滑ったことある？」

「ありますよ。結構得意です」

「私小学生以来だよ。それにスノボは初めてだし」

「彰くん上手いらしいですから教えてもらえますね」

沙希と恵麻ちゃんは気が合うみたい。ま、沙希は人見知りしないしね。

その時コンコン、とドアを叩く音。

「はい？」

私は玄関まで小走りしてドアを開けた。

ガチャ。

と、そこにはあつたのは例の3人の姿。

そして当たり前だけどアイツも…

「何？お前らまだ着替えてねえの？」

ドキ

…って私もしかして緊張してる！？柄じゃない！！

朝はすぐに車に乗り込んだから話してないしな…

「…早いよ。今着いたとこじゃん」

「とにかくくー滑りしようよ！せっかく来たんだから」

彰くんはハイテンションだ。

好きなんだろうなスノボ。

隣には眠そうな目の慶くん。対照的だなあ。

「んじャリフトの前で待ってるからな」

わかった。と答えると一目散に駆けて行く2人+マイペース1人。

プツ。小学生みたいだ。

その姿を見て自然に笑えてしまった。

「杏、何て？あれ、なんか笑ってる？」

帽子を被った沙希が部屋からひよっこり顔を出した。

妙に似合う。

「何でもないっ。早く用意しよっ」

「どうしたのいきなりやる気？」

「別に」。彰くん達リフト前で待ってるって」

「そ。あ、そういえば杏はさあ……」

ん？

「やったことある？スノボ」

……ん？

「……ないんだねその顔は」

……ま、何とかなるよね？運動神経はいいほっだし。

…甘い？

第三十九話 消えない存在

スキーは小学生の頃したことがある。

と言っても感覚なんてほとんど覚えてないけど。

だからリフトにも当然乗ったことがある。

…うん。顔が痛いよね。

「人によるんじゃない?」

私が初めてだと言うことを告げ、どうにかなるよね?って聞いたあとの反応。

…やっぱり?」

6人全員がリフト前に集合した時のことだ。

「じゃあ先に行くね」

当たり前のように二人で乗る沙希と彰くん。

「じゃあ私は恭介とっ」

ブラコン全開の恵麻ちゃん…。

で、必然的に今私の隣にいるのは慶くんだ。

相変わらず素っ気ない感じだ。

「…うう。運動神経は良いほうだと思うんだけど…難しい？」

「まあな…でもやってみなきゃわかんないだろ」

「だよ。なんか私出来そうな気がする」

「…どんだけポジティブなんだよ」

素っ気ないけどちゃんと返してくれる。

慶くんの雰囲気は何だか落ち着くな。私。

「ね、何回か着たことあるんでしょ？」

「ああ」

「キレイだよ。白銀の世界って」

「端っこはねずみ色だけだな」

…うん。まあ。確かにね。

「慶くんってツッコミ体質だよ…」

「…何だそれ。言われたことねえぞ」

あ、笑った。レアだ、レア映像。

「…お前って不思議だよな」

うん？

「似てるよな。アイツに…」

そう言った慶くんの横顔は…

私が今までに見たどの笑顔よりも、優しい笑顔だった。

「ね…？前にも言ってたけど…誰のこと…？」

そう聞いた途端、慶くんの顔はいつもの表情に戻ってしまった。

…聞かないほうが良かったかな？

ごめん。と言いかけたけれど

慶くんがそれを遮るように言った。

「元彼女」

え？

「中学の時に付き合ってた元彼女」

「そう…なんだ」

意外。彼女いたんだ。

それにこんなこと話してくれるなんて思わなかった。

「悪いな。」元カノ”に似てるなんか言ってる

「うづん、別に？それって見た目がってこと？」

この際だから突っ込んで聞いちゃおう。もうすぐリフトも終わっちゃうし。

「…いや見た目は微妙。…なんとなく雰囲気だな。それも時々っただけ」

「ふうん…」

…ふと思った。

さっきのあの優しい笑顔。あれってまだ好きだったことじゃないのかな。

「何で別れっちゃったの？」

遠くを見ている慶くんが目が一瞬伏せられた気がした。

これは聞くべきじゃない。

空気がそう言っているような気がした。

「間もなく到着です。リフトお降りの際には足元に『注意下さい』」

あと数m。もうすぐ降りなければいけない。

私は次の言葉が見つからなかった。

あと数cm。もうつま先が触れる時

「おれの浮気」

「へっ…?」

いきなりの言葉に気の抜けた返事をしてしまった。

「別れた原因」

慶くんはそう言ってリフトからすばやく降りると

手前で待つ彰くんの方へ歩いて行ってしまった。

…浮気?…本当に?

私は何とかリフトから降りると驚きのあまり少しの間動けなかった。

第四十話 消えない存在 Part 2

パシッ。

帽子に何か当たった感覚。

振り向くとそこにいたのはアイツ。

「なにぼおっとしてんだよ」

どうやら丸めた雪を投げられて見事にヒットしたらしい。

「…水嶋 恭介」

「んあ？手袋でも落としたか？」

「違うよ…あれ？恵麻ちゃんは…？」

ふと気が付くとあるべきはずの姿がなかった。

「ああ。恵麻の奴、降りるのに失敗してそのままスタート地点まで強制送還。苦手なんだよリフト」

「…そっか」

得意とか言ってたのにリフトは苦手なんだ。ふうん。

「お前さ、慶と何話してんの？」

え…？

「いや、慶って話題振っても一言一言で返すタイプじゃん？それで会話成立してんのかな、と思って」

「……そつでもないよ。普通じゃん」

「へえ、意外だな」

もしかしたら水嶋恭介なら知ってるかもしれない。

確か中学からの付き合い…だったよね？

「でも聞いて悪いことしたかもしれない」

「何を？」

真実を聞くんじゃないで、この話の重要性を聞こう。

「慶くんの…中学時代の彼女のこと…」

そう言った瞬間アイツの顔がこわばれるのがわかった。

本当に聞くべきじゃなかったんだ。

「それ…慶に聞いたのか？」

「…うん。」
「似てる」って言われて…
「誰に？」
「って聞いたら」
元

彼女”だって言われて…」

アイツは

「そうか」と言ったきり黙ってしまった。

「…やっぱり聞くべきじゃなかったんだね。無神経だった」

謝った方がいいんだろうか

それとも、もう話題にしないほうがいいのか。

「…ん、でも慶から言ったことだしな」

「…そうかもしれないけど原因は私だから」

この空気の重さでわかるよ。簡単に触れることじゃないって。

「それに…」

それにまだ好きなんだと思う…彼女のこと」

白い雪がゆっくり降り続けている。

周りではスピーカーから音楽が流れていて騒がしいはずなのに、

なぜかすごく静かに感じてしまう。

そしてアイツが重い口を開いた。

「でももう会えない相手だしな」

…え

「…会えない？」

それってどういふ…

「だってそうだよ。： 死んだ人には二度と会えないんだから」

第四十一話 するいよ

トントントントン。

トントントントン。

「…杏いつまで切ってるの?」

「…え?」

言われて手を止めれば、私の目の前にキャベツの千切りの山

…。

「…ったく。なんかさっきからぼおっとしてない? 疲れた?」

「…ん。まあ」

本日の夕食のメニューは、定番のカレー&サラダ。

ロッジがゲレンデに隣接している食堂より遠いため自炊だ。

彰くんのおばさんが冷蔵庫にたっぷりと食料を入れていてくれたので何でも出来そうだけど、やっぱり楽だから。という理由だ。

別々に作ると効率が悪いから夕食は男女一緒。

「それついでにあっち持ってくけど？」

突然の声に驚いて振り向くと、そこに水嶋恭介が立っていた。

片手にお茶が入ったコップを持っている。冷蔵庫に用があったんだろつ。

「あ…じゃあお願い」

「了解」

…びっくりした。急に後ろから声掛けしないで欲しい。

あのお話を聞いてから今日はほとんど話してなかったから…

そんな私をよそにアイツはサラダボウルを神妙に眺めている。

…何？

「…確か6人分だよな？これ」

「いいのっ…！私が食べるから…！」

そんなことかいつっ…！！

「こっちはちょっと落ち込んでるってことなのよ...」

「お前を」

何!?

「あんま気にすんなよ。慶のこと」

「じゃあねえ、俺も今日はベジタリアンだ」

サラダボウルをひょいっと持ってすぐにキッチンから見えなくなっ
た。

...ずるい

ずるいよ。いつだってそういつとは真面目なんだから…

…でもね

今の私はアンタのそんな言葉も心からは喜べない。

だって

『俺の浮気』

『死んだ人には二度と会えないんだから』

思い出したら自分の無神経さに腹が立つ。

何であんなことを聞いてしまったんだろう。

あれから運がいいのか悪いのか慶くんと話していない。

元からあまり話すタイプじゃないからかもしれないけど

避けられてるのかな…なんて思ったりする。

「これ味見しました？」

って何なのよ水嶋兄妹はっ！びっくりさせるなあ！！

「…してないよ。ついでだから恵麻ちゃんどうぞ」

私は小皿にカレーを少し注いで恵麻ちゃんに渡した。

「何これ？おいしいんだけど！？」

リアクションが正解じゃない気がするけど…まあいいか。

「ありがと。じゃあお皿に注ぐね」

今日の最初に

「扱いづらい」なんて失礼な発言をしたけれど

今は隣りにいて緊張しないうちの1人だな。

カレーを注ぎつつそんなことを思った。

第四十二話 自分勝手なため息

カレーは恵麻ちゃんが絶賛したただけあって大盛況だった。

…自分で言うのもナンですけど。

私は食べ終わると、洗い物を理由にそそくさとキッチンへ引っ込む。

…こっやって逃げてもしようがないんだけどね。

「…どっちが正解なんだろう」

謝るか。話題にしないか。

「独り言デカイ」

ガシャとお皿が置かれたと同時に声。

私が今一番本能的に避けていた人の声だ。

…つわあ何か喋んなきゃ

「あ…私洗うから…そのまま置いといて」

…こんな言葉しか出てこないよー！！

「悪いな。よろしく」

律儀にお礼を言つとサッとキッチンから出て行ってしまふ。

「あっ」

…ってこんなところで話題にしない方がいいよね。

…気まずいのって私だけなのかな

はあ

私が原因なのにため息が出てしまう。

…やだなあ。すごい自分勝手だ。

「洗い物手伝おっか？」

「彰くん…！」

やば。ため息聞かれたかな！？

ってみんな何で急に現れるのっっ！？

「疲れたでしょ？スノボ」

「…うん。あちこち痛いカモ」

「あはは。でも初心者にしたら上達早いよ」

「ありがとう」

ため息は聞こえなかったみたいだな。安心。

「運動神経いいって得だよな。何でもこなせちゃうし」

にっこり笑うその顔にほっとする。

この人は確実に癒やし系だな。うん。

私が丁寧に手伝いの誘いを断ると、

「本当に？」と何度か確認したあとキッチンから出て行った。

せっかく言ってくれたのにごめんね。今は一人で洗いたい気分なんだ。

「杏、ベッド窓際でいい？」

ベッドが4つ並んだ本日の寝室に戻ると沙希がすでに寝転んでいた。

「いいよどこでも。恵麻ちゃんは？」

「お風呂。それより洗い物ありがと。朝は私するからね」

「当たり前っ。頼んだわよ」

RRRR

すると突然部屋の電話が鳴った。

「はい？」

電話に近い場所にいた沙希が出る。一体誰だ？

「あ、彰くん！え、明日？え〜とねえ…」

どうやら相手は彰くんのようなのだ。

話の内容は明日の予定。そういえば時間とか決めてなかったもんね。

嫌でも耳に入ってくる二人の会話を聞いていると

明日の予定の確認は早々と終え、二人の世界突入モードだ。

…別に聞きたくないんだけどな。

私は厚手のコートを羽織りベランダへ出た。

寒いけどその方が星がよく見えるって聞いたことがある。

ガラリ、と静かに窓を開け外へ出た。

「お」

え？

「偶然。杏ちゃん」

…だから杏ちゃん…っってもういいや。

そこには白い息を吐きながらニッと笑うアイツがいた。

第四十三話 特権だから

多分、ここ以外に会う場所なんてないと思う。

ベランダ同士が向かい合っていて、どちらからも人が出てきた場合こじやって出合ってしまうのは避けられない構造になっているようだ。

「やっぱり星が綺麗だよな、山は」

ベランダの手すりに両肘を寄せ空を見上げているアイツ。

「…そうだね」

確かに思ったとおり星は綺麗だ。

「明日も吹雪かなきゃいいんだけどな」

「…そうだね」

シんと静まった空間。

2つのロτζジ以外に回りにはいくつかの建物がある。

でも誰も外になんか出ていなくて

外にいるのは私とアイツだけのようないなる。

「…お前さっきから”そうだね”ばっかだな」

そんなこと…あるな。

「…水嶋恭介は何してんの？星の観察？」

「別に。外の空気吸いに来ただけ。そっちこそ？」

「…私は部屋で沙希が聞きたくもない会話してるからかな」

「ああ。あの二人か」

おそらくそっちの部屋でも二人のラブラブ感は伝わってるんだろう。

アイツはくっ、と笑いながら言った。

澄んだ夜空に澄んだ空気。

ぼおつと空を眺めていると吸い込まれそうな感覚になる。

「おれの元カノ話してやろうか？」

「はあ？」

澄んだ空気にはまるで似合わないまぬけな声を出す私。

一体何言い出すんだこの人は!?

何で私はこんなヤツ意識してるんだ!?

「って言っても数ヶ月の彼女だけだな」

「…いらぬしそんな話」

今じゃなかったら聞いてたかもしれない。

でも今は聞きたくないよ。

「告られて付き合ったらフラれた」

だから聞きたくない…って、ええ!?

「…あんたがフラれたの?」

驚きのあまり思わず聞き返してしまった。

「そう。思ったのと違っって、ね」

「…そんな返品みたいに」

「返品ってヤメテヨ。何気に傷付くノヨ」

水嶋恭介はわざとらしい言葉遣いだ。

…やっぱりこの人わかんないかも。

「ってまあマジな話。見た目先行で告ってきて、中身違うから返品します。みたいなもんだな」

「…えらく自虐的だね」

もう少し気の利いた言葉言えないのかな。私は。

「今までそういう奴嫌って言うほど見てるからな」

「じゃあ何でそのコとは付き合ったのよ？」

「え？や…意外とタイプだったもんで」

あは、と笑うアイツ。

…まあそういうこともあるか。うん。私にはないけど。

「俺は多分すごい一途だから」

今までのトーンと違う声。

「え…」

思わず見上げてしまった。

「気になるコがいて、そのコが悩んでたら話聞いてやりたいし困ってたら助けてやりたいと思うし」

淡々と言葉を続けるアイツ。

私はというと、何か返そうとするのに言葉が出てこない。

「ってな感じでおれの話は終了!」

パン、と手を叩いた音ではっとする。

「寒っ!部屋戻るっぜ」

「あ…っ」

「んあ?」

誰かに相談したいって…本当は今日ずっと思ってたのかもしれない。

「…っ…っ聞いていい?」

目が合う。ほんの数秒の出来事。

「……ごめん、やっぱりいい。水嶋恭介にとって何の得にもならないから……」

それは”気になるコ”の特権なんだよね……

私がそんなことを思っていると頭上から言葉が振ってきた。

「何?」

え……

「何?聞くけど?」

ふっと視線を上げて顔を見る。

そこには何の曇りもない優しい笑顔が向けられていた。

私やっぱり好きなんだ。

その笑顔を見てなぜか泣きそうになった。

第四十四話 何でだろっな

今日も天気は良好。

チラホラ雪は降っているけれど吹雪にはならないようだ。

『謝りたいって思うのは自己満足なのかな…？』

『それは杏の気持ちの問題だろ？』

謝りたいって思えば謝ればいいとおれは思う』

あの後、私が聞いた疑問にアイツはこう答えてくれた。

確かにその通りなのかもしれない。

ああだこうだと考えていても結局は自己満足な答えしか導き出せないんだ。

アイツを好きだと自覚してしまった私だけど

何よりも前にやらなきゃいけないことがある。

「…慶くん」

名前を呼んだ私に気付いてゆっくり顔をこっちへ向けた。

「何？」

「…あのね…昨日、ここで聞いたことなんだけどね…」

エレベーター

今は昨日と同じように二人一組でリフトに乗っている。

この時に言おうと思ったのは二人になれるからだ。

「ごめんなさい。私無神経だった」

リフトに座っていてあまり身動きがとれない

それでも私は精一杯に頭を下げた。

少しの沈黙が続く。

慶くんが何の反応もしないので私も頭を下げたままだ。

「…何で謝んの？なんかしたっけ？」

慶くんは、私が彼女と離れた本当の原因を知らないと思っている。

「…違うの。あのあと聞いちゃったんだ。言い訳したくないけど偶

然…」

慶くんの表情はいつもと変わらないように見えるけど

…違う。

どこか悲しげに見える。

多分。これから私が言うことに気が付いてるんだろう。

私は押し殺したい言葉をやっとの想いで吐き出した。

「…彼女が事故で亡くなったってこと」

バサッ

木に積もった雪が重さで地面に落ちた音がやけに大きく聞こえる。

リフトに乗っているせいもあるけれど

やけに時間がゆっくり流れている感じた。

「恭介にでも聞いた？」

思いがけずあっさりとした返事だったので驚いた。

「…うん」

「そう。まあ、聞いたことは大体合ってると思うけど」

「…ん」

「それで立花が謝る義理ないだろ」

「ううん、あるよ。絶対にある。」

「…確かに私が謝りたいって思うのはただの自己満足かもしれない。

でも、例えそう思われても言わないよりはいいから」

アイツに言われてこう思えたんだ。

「何て聞いた？ 恭介に」

え…？

「元彼女の話。何て聞いた？」

「…え、言っの？」

「そう、今」

慶くんの心理が読み取れない。

でも冗談じゃないってことだけはわかる。

私は観念してアイツに聞いたことを話し始めた。

「…えっと。多分慶の初めての彼女だろうって…」

で、知ってるのは2歳上ってだけで名前も顔も知らない。

…それで、慶はあんまり話さないからこれくらいしか知らないけど、慶にとっていい影響を与えてくれる人だ、って…。それは慶を見るとわかる、って」

これを聞いて思った。

慶くと亡くなった彼女さんはとてもいい関係だったんだろう、って。

「…私が聞いたのはこれくらいだよ」

アイツから聞いたことをなるべくアイツの言葉で伝えつつもだ。

「…ふうん」

言葉にすると陳腐かもしれないけど

この話を聞いて、やっぱりこの3人には固い絆があるんだと思った。

「俺より2つ上で違う高校に通ってた」

え？

「やけにおれに突っかかってきて、最初は何だこいつ。とか思ったけどな。」

周りの空気をすごい読めるヤツで、おれと同じ作家が好きだった」

これってもしかして…

私が不思議な表情をしてたからだと思う。

「元彼女の話」

…やっぱりそうなんだ。でも…

「何で私にそんな話してくれるの…?」

「間もなく到着です。リフトお降りの際には足元に『注意下さい』」

まただ。

いつも大事なところでリフトが着いてしまう。

そんな私の考えをよそに慶くんは、ふっと笑いながら言った。

「さあ…何でだろうな」

リフトの到着地点はもうすぐそこだ。

ちよつとは人の心配してくれてもいいんじゃないっ!?

「つてのは置いといて、復活した？」

…病み上がりの人間に突っ込ませないでよ。

「39度だって?家行こうかとも思ったんだけど、ゆっくり休めな
いと思つてね」

「…ん、もう平気っス」

沙希は沙希なりに考えてくれてるんだ。

…多分だけど。

「彰くんも心配してたよ?自分が雪山に誘ったせいかな、つて」
「うそ?全然違つのに」

さすがお人好しだ。彼女でもない私の心配までしてくれるなんて。

「ま、でも長引かなくて良かったね」

「だね。自分でも素晴らしい回復力だと思っよ」

本当は精神的疲労も大きな原因な気がするけど…

「…ねえ沙希」

「うん？あ、宿題なら私やってないからね」

…違っつてば。っていつかやるっよ。

「私さあ」

復活したらまず言おうと思ってたことがある。

自分だけじゃ多分…いや、絶対に気付かなかったから。

これを言ったら沙希はどんな反応するだろうな。

「やっぱりアイツのこと好きみたい」

ガタン。

あ、机の脚につまづいた。しかも顔がえらいことになってますよ。

「…はあ？」

期待通りのリアクションどころもありがとう。

「本当に？何で？いつ！？」

「詳細は控えます。でも雪山で、ね。何でか気付いちゃったの」

偶然起こった出来事が偶然にも重なって

偶然に自分の気持ちに気付いてしまったというところだ。

「はあ〜。確かにけしかけたの私だけど…まさかねえ」

沙希は信じられないと言わんばかりの表情だ。

ま、取りあえず座ろうよ。ね？

私が席に座ると沙希も釣られるように前の席へ座った。

「で、何？雪山で告ったの？」

「…してないって」

沙希はやけに目がキラキラしている。

…絶対楽しんでるでしょ？まあいいけどね。

「で、で、何が決め手なの？」

そんな前のめりになんなくても…

「…決め手ってというか…何となく？」

「何となく？」

頭上に？を浮かべて首をかしげる沙希。

「何て言うんだろ…急に思ったってというか。理由なんてないんだよね」

「ふん…そっか」

両肘をついて頬を支えている体勢になる沙希。

それはいい。…いいけど

「…何かニヤニヤしてない？」

「え、わかる？」

…わかるって。不自然すぎる。

「良かったね」

はい？

「私もうれしいんだもん。杏にそういう人が出来て」

今度は優しい笑顔になる。

…何だかくすぐったい気分だ。

「…ありがとう」

「でもって上手くいってけるとさらに良いんだけどな」

…お〜い。ニヤリ顔に戻ってますよ。

「期待しないでよ…あと余計なことはしないことねっ！」

これはビシッとっておおきなきや。

沙希は暴走癖があるし。

聞こえてませんよ。的な顔をしていた沙希も、私が念を押すとし
ぶしぶ

「はあい」と返事をしてくれた。

はあ。豪快なため息が出てしまう。

「何でため息？自分の気持ちをはっきりわかって気分はスッキリで
しょ？」

確かにスッキリはしたかもしれない。

モヤモヤしてたものがやっとなつた感じがするし。

でも…私の中にはもう一つ気になることがあるんだ。

第四十六話 支離滅裂なコール

そつえば私からは初めてだっけ。

アイツのメモリーを表示しながらふと考える。

そもそも数えるほどしかしてないんだよね。

発信ボタンを押して数コール。

『はー』

ドキン...

「あ...えと...杏ですけど...」

明らかに緊張している声になってしまっ…

『それはわかってるから』

番号出てるし。と続けて聞こえる笑い声。

…前だったら絶対ムカツときてたところだけど

「一応よ、一応っ…！」

ついつい出してしまう反論の言葉。

どうやらまだまだ素直への道は遠いみたいだ…

『何？どうかしたか？』

アイツのこんな一言で嬉しくなってしまう。

…やだなあ。これじゃまるで恋する女の子みたいじゃないか。

私が何も答えずにいるとアイツは続けた。

『…杏。お前もしかしてまだ例のこと悩んでんのか？』

アイツの言う、例のこと＝慶くんのことだ。

「あ…違うの。っていつかそのことで電話したから違わなくはないんだけど…」

うわ…支離滅裂なこと言ってないか私？

『うん、とにかく落ち着け。何言ってるかわからん』

笑いを含んだアイツの声がある。

「ちょっと待って。一旦深呼吸するから」

そう言って電話を耳から離れたのに、それでも聞こえる笑い声。

相当大爆笑をしているらしい。

…うん。落ち着いてきた。

「って笑いすぎじゃない？」

『別に笑ってないけど…ぶっ』

…完璧笑ってんじゃん！！

『で、何だよ慶のことだろ？つーかお前風邪は？』

え…？

「何で知ってるの!？」

『沙希ちゃん発、彰經由』

ああ。そういうことか。

「えつと風邪はもう大丈夫…デス」

『…まだ引いてるだろ。語尾がおかしい』

ああ、もつっ！全然話が進まないく！！

「あのね、私謝った。慶くんに」

「うんと、とりあえずそれを言おうと思って…」

「水嶋恭介がああ言うてくれたから…踏ん切りついたっていうか…」

アイツが何も言わないから、一気に話してしまった。

『うん。いいんじゃない？』

言葉だけ見ると関心なさそうに感じてしまふ。

でも何だかアイツは電話の向こうで笑顔で答えてくれた気がする。

これって自分に都合のいい考えなのかな。

『おい杏聞いてんのか?』

「え!?!あ…何?」

そんなことを考えていたらアイツの話を全く聞いていなかったらしい。

『杏から連絡なんて珍しいじゃん。つーか何回か会ってるけど連絡自体久しぶりか?』

「…ん。そうだね。」

電話越しに聞こえるアイツの声がやけに心地いい…

「杏」と呼ばれることも今じゃ全然嫌じゃない。

『…杏。寝てんだろ?』

え!?!あ…また聞いてなかった!?

『やっぱりお前面白いわ』

電話の向こう側で多分また爆笑されている。

それでも頭に来ない私は…

やっぱり好きなんだと再び自覚させられてしまった。

第四十七話 大事なこと

冬真っ只中になり、この辺りでもチラホラ雪が見られる頃

今さらですが、ここは都会でも田舎でもなく

まあ、平々凡々でどこにでもあるような街です。

「そろそろ期末かあ…」

私がつと呟いた一言で隣の人が青ざめている。

言っまでもなく沙希だ。

「もうそんな時期だっけ！？最悪だあ…」

「別にそんなに成績悪くないでしょ？」

「そうだけどさあ…勉強すること自体が嫌いだし」

そりゃ私だって嫌いだよ。

しなくていいって言うんなら誰が好き好んでやるものか。

でもそういうわけにもいかない。学生も色々大変なんだよね。

「あ、そうだ」

突然の沙希の一言。

私の嫌な予感、相手が沙希の場合100%の確率で当たる。

…絶対何か言い出すぞ。この」。

「彰くん達と勉強会しよう！」

するっではなく、しよう。

この場合すでに私に発言権はなく、決定事項だ。

でも念の為確認してみる。

「…それって独り言？」

「まさか。杏もよ。決まってるデシヨ？」

やっぱりね。うん、わかってたよ。そんな気はしてた。

「ねえ杏」

「ん〜？」

私はもうすっかり諦めモードだ。

何だかんだ言っても沙希には付き合っちゃうんだよなあ。

「恭介くんと何か進展してるの？」

オイオイ…ド直球な質問だな。もうちょっと包もうよ。

「…別にいい」

本来私は恋する女の子タイプではないらしい。

好き。やっぱり好き。と自覚してもそうそう行動出来るもんじゃな
い…

「ちょっと、別についてやる気あんの!？」

「…うん。どうだろう。ね？」

「ね？」じゃないわよっ！その神に与えられた顔で勝負しかける
!?!」

神に与えられた???とんだけスケールの大きい話!?

っていつか何で私が沙希に怒られてんのっ!?

「顔で落ちる相手じゃ今さら苦労しないか…でもやっぱり良いに越した事は…」

何やらブツブツ唱えている沙希。…暴走の予感。

そしてやたら目が怖い。真剣すぎて眉間にシワ寄っちゃってますから。

「ね、連絡は？取ってるの？」

「あゝ…たまああにメールぐらいなら」

本当に文字通り、”たまああに”だけ。

「…それでイライラしない？」

「しないけど？」

私の答えに沙希はますます顔をしかめる。

「会いたい」とか思わない？」

「…そんなには」

あ。そんなにってことは多少思っちゃってるんだ。

また自分じゃ気付かなかった事に気付いてしまった。

「…確認だけど好きなんだよね？」

うっ…改めて聞かれると赤面しそうだ。

しないけどね。

「…だよ？何で？」

「だって、恋してルンルン浮かれちゃってます　みたいにならないんだもん」

何だそりゃ！他のコはみんなそうなの！？違うでしょ！？

「それって偏見だよ」

「じゃあ質問を変えます。ハイ立花杏さん！」

「…何ですか？」

沙希は先生気取りでありもしないメガネをクイツと直す仕草を見せる。

本人が楽しそうだからあえてツツコまないでおこう。

「彼。水嶋恭介さんとして”ドキ”としたことはありますか？」

ぎゃあ！！教室でフルネームで言うなっっ！！

「否定しないってことはあるのね。フムフム…」

勝手に決めるなあ！！

まあ、あるけど…

「一緒にいてどうですか？楽しい？嬉しい？」

…一緒にいて？

確かにそれも間違いじゃないと思う。でも…

「どっちかって言うと…」楽かな？」

「楽？」

「あ、ちょっと違うかな。でも気負わなくていいし、変に気を使わないでいられるし。」

アイツの一言で楽になったこともあるし…そこについて何て言つか…」

上手く自分の気持ちを表現できる言葉が見つからない。

「安心”って”と？」

「…多分」

”安心”って言うと大袈裟かもしれないけど。

今はその言葉がぴったり当てはまる気がする。

「それって大事なことだね。絶対に」

何の邪心もない笑顔は、沙希をいつもの数倍かわいく見せる効果がある。

「彰くんは？どうなの？」

「もちろん！一緒にいて楽しいし、安心するよっ」

沙希の幸せそうな笑顔を見ると何だかこっちまで優しい笑顔になってしまう。

「じゃあとにかく5人で勉強しようねっ。集合かけとくから」

「あ、そっか。5人だから当然慶くんもだよね…」

あの日から慶くんとは会ってない。連絡先も知らないから当然だ
ど。

「うん？そつだよ？あ、まさか浮気心！？」

茶化したように沙希が言う。

「違つてば…ただ。ちょっとね…」

あの日からずっと何か心が心に引っ掛かっている。

そんな気がしてならないんだ。

第四十八話 突然の…

沙希は自分が楽しめることには、とにかく動きが速い。

勉強会の話もあれよあれよという間に決まってしまった。

「ね、これはこうだっけ？」

「そうそう。沙希ちゃん覚え速いね！」

「彰くんの教え方がわかり易いんだよっ！」

毎度おなじみのバカップル。さらに磨きが掛ってるのは気のせいだろうか。

ここは例のファミレス。

テストシーズンになるとこつこつという学生の姿がよく見受けられる。

来た時は座る席がいつも同じ。暗黙の決まりごとのようになっている気がする。

「杏、この公式違う」

「へ？」

私の前に座っているアイツ。会ったのは雪山以来だ。

「本当だ…」

私は消しゴムで一度解いた式を消していく。

いつもなら間違えるはずのない問題なのにな…。

新しく問題を解き直していると何だか視線が気になる。

とりあえず問題は正解だ…

「…何？」

目線をチラリとあげると肩肘をつけているアイツが私の方を見ていた。

正確には私のノートを、だ。

「いや、正解。問題解くの速いねお前」

「…見てないでやりなよ。知らないよ赤点取っても…！」

って、ぎゃあ…！

私の言ったセリフに過敏に反応している沙希がこっちを見ている！

だから怖いってば…！その顔っ…！

「知らないだろ？俺ってば結構優等生ですから」

「そう…なんだ」

ほっ。沙希はまたバカップルモードに戻っている。

って優等生!?

「優等生って本当に…? 英語だけじゃなくて?」

疑うわけじゃないけれど。お世辞にも優等生タイプには見えない…

「だよな慶? 言ってやって俺の戦歴」

自慢気な顔がやたらムカツク。

…嘘だ。全然ムカツけない。

「知らねえ。興味ない」

ばっさり切り捨てられるアイツ。

ぷっ。

二人のやり取りに笑いを堪えているとスッと目の前に私のじゃないノートが現れた。

ん？

「立花、ここ教えて」

ぱっと顔を見ると、それは慶くん。

「あ…えっと、どれ？」

教科は英語だ。なるほど。私が得意なのも知ってるしね。

「ええっと…ここは関係代名詞の”that”が…」

「なるほどね。サンキュ」

慶くんもかなり頭の回転が速いらしい。

自分が教えたことをわかってくれたらうれしくなってしまう。

「慶、英語だったら俺がいるだろ。遠慮すんなよ」

お？敵対心燃やしてる人が約1名。

「恭介、文法の説明出来ないだろ」

「…あはは」

水嶋恭介に限らずこういう人は多い。話せるけど文法は…ってね。

ひたすら問題を解き続けていると、随分と時間が経っていた。

「そろそろお開きにしようかあ！」

彰くんの一言でみんな一斉にリラックスモードになる。

「結構進んだかも。これならいけそう！」

沙希が言った一言はみんなに言えることだった。

「ありがとうございます」

店を出て駅まで数分の道のり。

「わ。恵麻から電話だわ……」

アイツの携帯が鳴ったかと思うとこの一言。

相当愛されちゃってるな。ナイス恵麻ちゃん。

電話に出るために少し離れて歩くアイツ。

自然に並びは前方に沙希と彰くん。後方に私と慶くんだ。

短い道のり。特に会話もなく淡々と進んでいる。

「この前聞いたこと」

「え？」

急な慶くんの声に驚いて立ち止まってしまった。

「や、歩きながらでいいし」

「あ…うん。そうだね」

…この前？私何聞いたっけ？

私の考えてることが伝わったのか慶くんは続けた。

「聞いただろ？」何で私にそんな話するのかわかるのか？”って

ああ！

…でもそれが？

「…聞いた、ね。…それがどうしたの？」

私は思った通りのことを聞いてみた。

「それ俺も考えてたんだわ。あれから」

そうなんだ…

慶くんは前を見たまま続ける。

「俺多分」

うん…

「お前のごと気になってかもしれない」

うん…

…うん？今…何て？

まだ完全に今の言葉が理解出来ないでいる私の足が止まる。

「…え」

ゆっくり顔を上げた私は…完璧に頭がパニックだ。

「だから歩きながらでいいって。別にどつどつするってわけじゃないから」

歩きながらって…

そんなもん普通に歩けるかあ〜っ！

って、え…え…何、今の!?

慶くんはすでに長い足でスタスタ歩き出している。

ちょっと待ってよ…今のって…

「…!」

あまりの驚きで頭が真っ白になった。

第四十九話 冗談じゃないよね

グルグル回る頭の中…今何を考えているのか自分でもわからない。

電車に乗ってちゃんと家に帰った。記憶もちゃんとしてる。

でも気が付いたら朝になっていた感じた。

「杏聞ってる？」

「うん…」

思考回路が全く追いつかない。今私は教室で自分の席にいるんだよね？

「…聞いてないでしょ？」

前には沙希の姿が見える。何か言ってるけどはつきり言って右から

左へスルーしてる。

「…寝てんの？」

「うーん…」

あ。曖昧な返事しちゃってる。でも思考が戻らない…

パンツ！！

ぎゃあ！！何！？

突然、右の鼓膜に破壊音が響いた。

驚きのあまり椅子から転げそうになるが、寸でのところでセーフ。

音の発信源である沙希は不機嫌さを前面に押し出した顔を私に向けている。

「何！？何の音！？」

思いつきり叩いたのだろう。

沙希は

「私の手」と言いながら、両手をさすっていた。

…そんなに痛いならしなきゃいいじゃん！！

「杏今お昼だよ？いくらなんでも上の空の時間長すぎっ！」

「…別に上の空なんてしてないよ」

無茶な言い訳だと思う。ぶっちゃけ今でも上の空だし。

「あのね。そんなウソじゃ騙されてあげないから」

沙希はふう、とため息をつきながらも私をじろりと見ている。

「…ごめん。確かに上の空は認める」

「そりゃそつでシヨ」

何で上から目線なのよ…別にいいけど。

「うん…私って容量こんなに狭かったかなあ」

「人間って自分が思ってるより精工に出来てないらしいよ」

おお。沙希にしては博学なお言葉。

「で、その上の空の元は何よ？」

がちり私の腕を掴んで離さない。

や。実際には掴まれてないんだけど…気持ち的には四方を固められてる。

「何？もしかして告白した!？」

「えええ!？」

やばー！過剰反応してしまったー！！

「うそ…本気で？」

「違う違うー！！って違うわなくもないけど、半分違うっー！！」

出来るだけのスピードで手を振り、違うって伝えようとして…

「…半分？」

また墓穴…！私ってバカ！？

沙希が見逃してくてくれるはずもなく5時間目が始まるまでみっちり尋問を受けた…

それでも慶くんのこととは言えなかった。

…というより”言わなかった”の方が正しいかもしれない。

だって…仮にも人の気持ちをむやみに話したりしたくないし。

中には”冗談でしょ？（笑）”で済ませられる人もいるかもしれないけれど

相手は慶くんだ。絶対そんなタイプじゃない。

…あの言葉

『お前のこと気になってるかもしれない』

今思い出しても信じられない…。

冗談…じゃないよね。やっぱり。

ふう…

ダメだ。先生の話も全然頭に入ってこない。

机に伏せがちになり、肩肘をついて窓から外をぼおつと見る。

…やたら良い天気だなあ。授業点引かれるかもしれないけど別にいいや。

『どっぴろりするわけじゃない』

って…私はどうしたらいいの？

慶くんの考えてることがわかんないよ…

第五十話 タイミング

夕方の最寄り駅は制服姿の学生でいっぱいだ。

この駅には高校や中学が密集していて特に多いらしい。

沙希と別れたあと、私は改札へ入らず駅のロータリーへ向かう。

どの線に乗るにもここを通らなければならないので一番混んでいる場所だ。

ベンチに座り、流れていく人に目を凝らす。

…ここ通るでしょ？

あれから2日。話をしようと思って連絡先を知らないことを思い出した。

沙希に言って彰くんに連絡取ってもらうことも出来るし、

水嶋恭介から聞くことだって出来る。

でもそれじゃあ誰だって疑問に思うだろうし…

聞かれたら理由言わなきゃいけないから…正直困る。

で、ここで待ち伏せることに決めただけ…

人多っ！ここで本当に見つけられるの私！？

でも前に偶然アイツに会ったし…無理ではないと思う…

ってあの3人一緒に居たらどうするの！？

…だめじゃん。

がっかり俯いてしまっ。出直そっ…

ゆっくり顔をあげて立ち上がった瞬間

自分の間の悪さに呆れてしまった。

「あれえ？立花さんだ」

彰くん！？ってことは…！！

「杏じゃん。今帰り？」

すぐ隣に水嶋恭介の姿。

そして…

「…連れは？」

そしてもちろん慶くんの姿もあった。

私どんだけタイミング悪いのよっっ!!!

「あ…沙希とは今別れたとこで…」

嘘ではない。ほんの10分前くらいのことだ。

なんだあ、と残念がる彰くん。…さすがバカップル。

「帰るんだろ？」

と改札口を指差すアイツ…

これって一緒に行くって…こと!?

何だかすごく居心地が悪い気がする…

3人のうち2人に緊張している。彰くんだけが唯一の癒しだ…

「…みんな何線なの？」

「俺たちみんな東條線だよ。地元同じだもん」

あ、そうか。考えてみればそうだよな。

つまり慶くんと話すチャンスはないってことか…

そうこうしている内にすでに東條線の改札に着いてしまった。

「じゃあね立花さん。また5人でどっか行こうねっ！」

手を振ってにつこり笑う彰くんには何の嫌味も感じられない。

「…だね」

私も手を振って答える。

「んじゃあな、杏」

続いてアイツも改札へ入っていく。

「ん…また」

…せっかく会ったのにほとんど話してないな。

そして最後に慶くんも改札に…

「俺本屋寄って行くわ」

入らない!?

「そう? んじゃ明日」

よくあることなのかもしれない。 彰くんとアイツは軽く返事をして階段を上って行ってしまった。

…つまり今二人ってこと?

そう考えるとさらに緊張が襲ってきてしまう。

…話すって決めてたのに、いざ2人になると何から話せば良いかわからない。

「ちよつと時間いいか？」

え！？

思いがけない慶くんの言葉。

パツと顔を見上げるとバツチリ目が合ってしまった。

第五十一話 何の話…？

「ん」

慶くんの声と同時に私の掌に温かい感触。

「ありがとう…あ、お金」

「いい。それくらい」

「…じゃあお言葉に甘えて」

混み合う改札口から少し離れた3人掛けのベンチ。

プシュ、と缶のプルトップを開け口に含むと

気付かないうちに冷えていた体に温かさが広がった。

この間、約数十秒どちらからとも言葉はない。

「…ね、何か話あった？」

多分話があるから引き止めたんだろ。

私も話したいことがあるとはいえ、まずは慶くんの話の聞くことが先のような気がする。

「そつちこそあるんじゃない？」

え…？

私の驚いた表情がわかったんだと思う。

慶くんは缶コーヒーをほんの一口飲み、さらに続けた。

「不自然だから。チラチラ様子伺ってる、みたいなの？」

「う…それは…」

そりゃあ不自然にもなるっつてば。

あんなこと言われて…平気でいられるはずがない。

だげどドキドキとか、そういう感情じゃないんだ。

「…あのね。この間のことっていつか…うん。

つまりあれはね…？えっと…」

上手く言葉が回らない。聞きたいこともあるのに空回り。

頭の中で言葉を探していると、なぜか隣から”くっ”と笑う声がした。

私ってもしかして挙動不審…！？

「あ、悪い。でも俺らって”この間のこと”の話ばかりだな」

いつもと同じような態度。ううん。むしろ笑ってる。

「ねえ。あれはどういう意味？私は…どうしたらいいの？」

真っ直ぐに相手の目を見て聞く。視線がぶつかる。

…不思議だけど、やけに落ち着いている私がいる。

あれほど言葉が見つからなかったのに、なぜかスッと口に出た言葉だ。

297

そして慶くんの口がゆっくりと開く。

「おれ冗談とか言わないタイプだから」

…わからない。それが私の質問に対する答え？

「かといって別に立花にどうしろなんて言わないし」

…何よそれ

「それって自分勝手じゃない…？」

慶くんは私の言葉の意味がわからない、といったような顔を向けている。

だけどそうでしょ？だって…

「じゃあ私はどうしたらいいの？そうやって自分だけで解決しちゃうって…」

あんなの誰だって考えちゃうよ…。じゃあ慶くんは何の為に言ったの？」

感情が高ぶってしまふ。責めたいわけじゃないのに…

「…じゃあ何？」好きだから付き合ってくれ”って言えばいいわけ？」

急な射抜くような鋭い視線に私も視線が外せなくなる。

その鋭い視線の中に曇る瞳が見え隠れしている気がして…

「そういうわけじゃない…っ」

視線を下げてこう言うのがやっとだった。

駄目だ…。このままじゃ何の解決にもならない。

引き上げようと立ち上がった私を止めるように慶くんはさらに続けた。

「多分俺はこの先その言葉をいう事はない。壊すくらいなら手に入れない方がいい」

こわ…す？一体何の話…？

話の中身が見えない。立ち尽くす私を横目に慶くんは立ち上がり、カバンを片手で持ち上げた。

「でも立花の言った通り、言った俺にも非がある。だから忘れてくれていいから」

そして空き缶をすぐそばのごみ箱に投げ入れ改札へ向って歩き出した。

ゆるい放物線を描いて空き缶はごみ箱へ吸い込まれてゆく。

カラン、という音が…なぜだか寂しそうに聞こえた。

第五十二話 大切なもの

好きの延長にはずっと一緒にいたいって想いがあって

嬉しいことも悲しいことも全部一緒に分け合いたい。

恋愛経験が豊富じゃない私でもこれが普通のことだと思ってた。

『壊すくらいなら手に入れないほうがいい』

あれって…つまり…

慶くんが彼女を壊した…ってこと？

彼女さんは交通事故で亡くなったんだよね…？

思考回路が最悪な結末を想像しようとして、はっとした。

そんなわけない。あるはずがない。

事故で家族を亡くした人の辛さは痛いほど知ってる。

加害者をいくら恨んだって死んだ人は戻ってこない

そのことがわかった私でも加害者が憎いという想いは…当然ある。

でもそれが当人の一番大切な人だったら？

自分の責任で大切な人を死なせてしまったら？

「…まさか…そんな」

思わず声に出して呟いた。

心では思っただけでも、頭では違うことを考えてしまう。

私の考えすぎだよね…？

あの鋭い視線…それにあの目

「…忘れられるわけじゃない」

）

「…！」

ベッドの枕元に投げ出されていた携帯電話が鳴った。

びっくりした…！誰だろ…

サブディスプレイに浮かびあがったのは”恭介”の文字。

不謹慎にもやっぱり胸がとくとんと高鳴る。

そつと開いてメインボタンを押すと、アイツからのメールが画面に現れた。

『From: 恭介

To: 杏

Sub: 無題

本文: よつ(＾o＾) /

今日は偶然だったな。

彰も言っただけど、冬休み入ったらまたみんなでどっか行

こうぜ！

その前に期末だな。赤点取んなよ(笑)』

「バカ: 取んないって」

聞こえるはずはないけれど無意識に答えてしまっていた。

ほんとずるいよ...こんな時いつもアイツの言葉に助けられる。

少し滲んで画面が見えなくなった目を拭いて私は返信メールを打つ

『 From:杏

To:恭介

Sub:Re:そっちこそ!

本文:本当、今日は偶然だね。

沙希にもそう伝えておくよ。多分彰くんから伝わってる
と思うけど…

そっちこそ油断して赤点取らないように(笑)』

ボタン。と携帯を閉じると自然に笑顔がこぼれる。

”好きの延長にはずっと一緒にいたい”

この想いはまだ十分とは言えないけれど

少なくとも今は、この繋がっているメールが大切だと感じている。

その時にふとある想いが浮かんだ。

『お前見てると思い出すわ』

『嬉しいような嬉しくないような…ってどこかな』

『似てるよな。アイツに…』

もしかして…

慶くんは本人でも気付かないうちに私と亡くなった彼女を重ねて見
てるんじゃないだろうか

私が慶くんの言葉を信じられないと思う理由はこれ…？

『壊すくらいなら手に入れないほうがいい』

これはきつと慶くんが恋愛すべてを放棄した言葉

でもそんなの…悲しすぎるよ

第五十三話 いっぱいあるんだよ

「はい止め」

言葉とともに安堵のため息や恐怖の叫び声が聞こえる。

学生の本業は勉強

その成果を試されるのが年数回行われるテストだ。

今日そのテストの4日目を終えたところで全日程が終了した。

あとは冬休みを待つのみ。学生はいやでもテンションがあがるってなもんで…

ここにも例外じゃない人が約1名。

「どこ行こっか？ワンダーランドのカウントダウンなんてどう？？」

私達はテストが終わったのに昼から帰るなんてもったいない、と例

のファミレスに来ている。

あの3人が通う北野高校は、終了日こそ同じだけど教科数が違い1時間遅いらしい。

「あ、でもやっぱ初詣行きたいよね」

沙希は休みの計画をアレコレと考えていることと、テストが終わった解放感により満面の笑みだ。

「初詣は彰さんと2人で行かないの？」

ちなみに沙希が今考えているのは”冬休みに5人でどこかへ行く”計画だ。

「うん。カウントダウン行ってそのままみんなで初詣、っていうコースもありなんだけど？」

…何で疑問系？

「ちょっとでも長い時間一緒にいたら嬉しくない？」

「私？」

自分で自分を指差す私に思いっきり頷く沙希。

「えっと…私のこと考えてくれるのはうれしいよ？」

でも沙希と彰くんの邪魔はしたくないんだけど？」

確かに5人で会う以外にアイツと会う確率はゼロに近い。

だけど私のことで2人の時間を奪いたくないのは本音だ。

「ううん。私が楽しんでるだけだから気にしないで」

スッパリと人の恋を楽しんじゃってます宣言。

良い意味でも悪い意味でも沙希らしいというか何というか…

「だって杏と恭介くん、ほっといたら全然進展しなさそうなんだもん。」

これは親友として頑張らねば、と思うわけよ」

”それで私がね…”と独自のシナリオを披露する沙希を暴走中と判断した私は

”うんうん”とタイミングよく相槌を打つ。

…だってアイツが私に告白する。とか言っちゃってるんですよ？

まずその時点でないでしょ。好きなのは私の方なのに。

「ってわけ。どうよ？」

長々と続いたシナリオが終わり、私に同意を求めるような聞き方。

「…無理でしょ？ハードル何個越えなきゃいけないのよ…」

沙希のシナリオは最終的に、告白される 付き合う 長続き 私達の結婚式に2人で来てね になった。

最初っから思いつきり躓いてますから。

「そんなことないよ。だって…あ!…何でもナイ」

…明らかに気になるような言い方。いいや。あえて聞かないことにしよう。

「あ。ねえ、そろそろ出てもいい?」

ふと気付くと時刻はそろそろ2時を迎える。

「だね。冬は暗くなるの早いから遅くなると困るもんね」

会計を済ませて店を出て駅へ向う。

沙希はこれから彰さんと待ち合わせ。嬉しそうに手を振って別れた。

私はその足で花屋へ向かう。

冬の夕方は風が冷たい。日が暮れるのも随分と早い。

「来ちゃった。誕生日以来だね！」

私は制服のまま姉のお墓に来ていた。もちろんコスモスを持って。

あの日、慶くんと話を聞いて考えて…無性に姉に会いたくなっただ。

なのにテストは待つてくれない。ので少し遅くなってしまった。

「じゃん！今日はホワイトコスモスにしてみました」

冬らしい淡く白い花が咲くウィンターコスモスだ。

包みから取り出しコスモスを生けているとあの花のことを思い出した。

「あ…そういえばストロベリーチョコ」

いろいろあつて忘れていたけど…結局誰だったんだろう。

ザワザワと風が吹いて木が揺れる音。ここではその音だけが聞こえている。

ま…いいか。

「…聞いて欲しいこといっぱいあるんだよ」

本当は答えて欲しいけれど、そうもいかないよね。

私は久しぶりの姉との時間を楽しんだ。

第五十四話 どうして…？

すっかりしないまま日は続き、とうとう冬休みへ突入した。

試験結果は上々。めでたく赤点もなかった。

私は今、家中を搜索している。

『カウントダウン行って初詣も行くから。あ、一旦帰って晴れ着でね』

沙希のこの一言により初詣は着物で行くことになったからだ。

いつもの通り、すでに決定事項だったわけで…

「…あれ…どこだっけ？」

私は着物を2枚持ついて、赤と紫。どちらもキレイな色で気に入っている。

アメリカへ行く前に両親が買ってくれたもので

”日本人なら持って行って損はない”という父の言葉。

半信半疑だったけど、向こうで着たときはすごぶる評判が良かったので驚いたことを覚えている。

ちなみに誰も着付けてくれる人がいなかったなので自分で覚えた。

意外な特技の一つだったりするんだよね。

「あつた！」

やっと見つけたそれを丁寧に取り出すと、桐たんすの匂いが鼻をかすめた。

私は小学5年生の頃すでに身長が158cmあり、その後あまり伸びずに今は162cm

なので難なくこの着物を着ることが出来る。

色どっちにしようかな…赤？紫？…うん。

大輪の白い花が描かれている赤

幻想的な蝶が描かれているグラデーシヨンの紫

沙希は確か赤系だから…私はこっちな

紫色を少しあてがって鏡を覗き込むと、昔と違った自分がそこに映
ってるような気がした。

…こんなに大人っぽい色だったっけ？私も成長したもんだな

着物の大きなハンガーにしわにならないように掛けると、私はも
う一度たんすを探り始めた。

確か併せて買った髪飾りもあつたはず…昔は地味だと思ってあんま
り好きじゃなかったけど…

手を伸ばし狭いたんすの中を右往左往していると手先にコツンと何
かが触れた。

これかな？

戻した手に握られていたのは小さな和紙の箱。…私のじゃない。

「…ってことは優姉の？」

姉も同じく着物を持っていたので、同じ場所に保管されていても何ら不思議はない。

一先ずその小さな箱を横へ置いて私は再びたんすの中へと手を入れた。

これじゃない…これでもない…あ！

透明の箱の中には見覚えのある黒地に蝶が描かれた蒔絵かんざしだ。

…っていつか小学生に買うにはシブ過ぎるような…

髪を無造作に上げゆるく挿してみる。

ま…今ならアリか

パツとかんざしを抜いた手が何かに当たり、カタンと落ちる音がした。

「あ」

あの小さな和紙の箱。落とした拍子に箱が開いて中身が出てしまっている。

私はしゃがみ込みその飛び出た物を手に取った。

「やっぱり優姉のだ。この帯紐見たことある」

中には帯紐の他にも髪飾りやピン止めなどが入っていたらしい。

落としてしまった物をひょいと拾い上げては箱の中へ戻していく。

ふと箱の中に目をやるとあるものが目に入った。

「……写真？」

何でこんなところだ？

写真は何枚か重なっており、一番上には着物を着て笑っている姉が写っていた。

「これ…いつだろ。中学、かな…」

髪の色が黒い。少なくとも高校生の頃じゃない。かといって小学生ではなさそうだ。

2枚目は大吉と小吉のおみくじと一緒に写った写真。

2枚写ってるってことは…母だろうか？

その写真を見るとふと笑みがこぼれてくる。

姉はどっちだったんだろう。何て思いながら私は最後の写真を見るために2枚目を一番最後へ移動させた。

「！」

そこに写っていたのは楽しそうに笑う姉の姿。そして隣には少し仏頂面な少年の姿。

まだ幼い顔をしているけれど、すぐにそうだと気付くことが出来る。

どうして…どうして彼がここ…

私の指先からすると写真が落ちる。ゆっくりとひらひら舞っているようなそれは

やがて裏を向いて私の足元へと降りて来た。

写真の裏に書かれた文字

『200×年1月2日 南金原神社にて

慶 中学1年 優 中学3年』

第五十五話 それは

和室から自分の部屋までの短い距離をひたすら走った。

走ってるのに足が空を蹴る感じがして全然前に進めていないように思える。

早く…早く…！

ドアを乱暴に開け放ち、閉めるのも忘れてベッドへ倒れるようになだれ込んだ。

いつも枕元に置いてあるはずの携帯が見つからない。

イライラした気持ちを抑えつつ掛け布団、毛布を次々とめくっては探す。

ない…ない…何で…っ!?

パツと枕を持ち上げるとそこにいつも通り携帯はあった。

開いて番号を表示させるにも、指が震えてしまっていていつもの倍の時間がかかってしまう。

落ち着け私…っ！

プルルルプルルルプルル…

呼び出し音がやけに私の苛立ちを増幅させる。

プルルルプルル…プッ

『はいはあ〜い？』

「沙希っ！？私っ！！」

私のただならぬ声に”何？どうしたの？”と沙希も驚いている。

でも今はそんなことに構っていらなくなって自分のことで精一杯だ。

「お願いっ！彰くん！慶くんの連絡先聞いて私に教えてっ…！！」

考えてみると、普通なら”どうして?”と聞くところなんだろう。

”だけど沙希は”…わかった。ちょっと待ってて”と何も聞かないでくれた。

電話を切った私はズルズルとベッドに寄りかかると

急に息苦しい感覚に襲われ、大きく二、三度深呼吸をした。

…とにかく。沙希からの連絡を待とう

ふと気付く。携帯と同じく自分の右手で握っているあの写真。

思わず持って来てしまっていた。自分でもわからないままに。

ゆっくりと広げると、さっき見た時と変わらない姉の楽しそうな笑顔。

そして傍らには私の知ってる限りでは、そこにいるはずのない人

”ただど写真に写り込む二人の空気がそれを”そうじゃない”と否定

している

…どうして？優姉と慶くんは何で…

）

その音にすぐさま携帯を開きメールを確認すると、そこにはしつかりと慶くんの連絡先が記されていた。

沙希へのお礼を忘れていたわけじゃないけれど、何よりもその連絡先を待っていた私は

震えが止まった指で登録を済ませるとすぐさま発信ボタンに手をかけた。

何を言おうとか。何を聞こうとか。そんなの何も考えていない。

ただ話さなくちゃ。その思いだけが私に電話を掛けさせている。

『…はい』

聞き覚えのある低い声。

『慶くん私…！！聞きたいことが…っ！』

落ち着こう。と思っけていても、どうしても駄目だ。

『…立花？』

勢いのあまり私は名乗ることも忘れていて。それでいて何から聞けば良いかわからなくて。

『何？とりあえずわかるように…』

「今井 優」

口に出たのがこの言葉だった。意図なんかない。ただ気が付くと口にしてた。

『お前…今何て…』

慶くんの明らかないつもと違う雰囲気を読み取れる。その声に、反対に私は落ち着いてきた。

「今井 優…知ってるよね？」

もう一度確かめるようにその名前を声に出す。泣きそうになるのを必死で堪える。

『…恭介…じゃないな』

慶くんの問いかけかもわからない言葉に私は一度頷く。見えるわけじゃないのに。

「…誰かから聞いたんじゃない。そうじゃないの」

ああ…やっぱりそうなのかもしれない

「今井 優…はね」

だから慶くんは私にあんなことを言ったんだよ

「それは…」

だって共通点がありすぎる。思い出すには十分すぎる。

「私の姉だから」

第五十六話 溢れる寸前

賑やかで華やかなクリスマスが過ぎると

世間はまるで昨日までのことを忘れたかのように一気におごそかな雰囲気にも包まれる。

12月31日

あの日の出来事からはや一週間が経とうとしている。

”そうか”と小さな声を聞いたのが最後

私から連絡はしなかった。慶くんの心の整理が完了したら……と思っていたから。

そして今日、カウントダウンへ向う大晦日の午後一通のメールが届いた。

『カウントダウン終わったあと時間あるか？

聞きたいことも話したいこともある。』

たった2行の言葉。

それだけなのに。なぜだかぎゅっと胸が締め付けられる。

あるよ。私もある。

『わかった』

この4文字を打つことに、こんなに時間をかけたのはきつと初めてだ。

329

「やっぱりね寒いね。でも何か耐えられそう」

待ち合わせ場所では沙希は嬉しそうにはあ、と白い息を吐きながら待っていてくれた。

すでに夜の10時だというのに、周りはたくさんの人。

いつもなら日付が変わる頃に終わってしまう電車も、今日だけは朝

まで運行されている。

” そうだね ” と答える私に、 はやる気持ちを抑えられず初詣の着物の話をしている。

こんな顔されちゃ、 行けないかもしれない、 なんて言えないよね…

慶くんとの話が、 どういうものになるのかわからない。

話を聞いて私自身がどういう気持ちになるかもわからない。

けどこんなに楽しそうな沙希に気を使わせるようなことはしたくない。

「よ」

聞き覚えのある声。 それだけでわかる。

声を聞くだけで胸をトクンと動かされるのは、 今の私にはきつとこの人だけだ。

「あ、恭介くん。コンバンワ」

沙希の声と同時に私は振り返る。そこには間違えようもないアイツの姿があった。

と同時に一緒にいる2人の姿も目に映る。

私は自分でも気がつかないうちにコートをぎゅっと握っていた。

「立花さんも寒くない？」

彰くんの言葉ではっとする。思うよりも心は緊張しているらしい。

”大丈夫”とだけ答えると、にこっと笑い沙希に視線を向けた彰くんにほっとした。

多分…今凝視されるときっとボロが出てしまう…

わざとみんなの輪から視線を外した。落ち着かなきゃいけない。

今の空気を壊すことなんて出来ないか…ら…

え…？

気が付けば私はアイツに腕をとれられていた。

他の3人の姿が少し先の方に見える。

「お前何か今日変じゃないか？」

…！？

「な…何で？別にいつもと同じだけど…っ」

私は嫌じゃないのに。それなのにパツと腕を払おうとした。

駄目だよ。その目を見ると全て見透かされている気がして…

だけどアイツは簡単には離してくれなくて。さらにぎゅっと力が込められる。

お願いだから離して…っ

すると今までの力が嘘のようにすっと腕が解放された。

望んでたはずなのに。急に見放された気がして…空気が冷たく感じ
てしまう。

「風邪じゃないならいい。けど無理すんなよ」

思いもよらない言葉に私は顔をあげる。目に映るのはアイツだけだ。

「で、何かあったら言うこと。以上。行くぞ」

ゆっくりと進むアイツの背中。私に歩幅を合わせているのが見てい
てわかった。

もうこれ以上ないってくらいに、気持ち溢れる寸前まで来ている。

涙を見せないのがやっつとだ。

思わず出てしまいそうになる言葉を抑えて

私は全てを知る覚悟と、この気持ちを伝えることを心に決めた。

第五十七話 おめでとじ…

言い方は悪いかもしれないけど、沙希に振り回されて園内を駆け回っている

吹っ切った心はどんどん楽しくなってきた

なるようにしかならない。何てやけに前向きな考えが浮かんでくる。

考えて動けなくなってしまった私を、誰が気づいてくれるだろう？

気付いてくれたとしても、そんな私を誰が好意的に感じるだろう？

ふと後ろを振り返ると、今度はまっすぐに慶くんの姿を見ることが出来る

そして自然に笑顔を向けることが出来る。

「慶くん行くよ！」

私の声に驚いているのがわかる。きっと今日最初の私とは違っはず

だ。

ゆっくりと歩みを進める慶くんには私はもう一度声を掛けた。

「改札で別れた後近くのベンチに戻って来て…？ちゃんと話したいから」

私が前に慶くんを待っていたあのベンチ。近くにはそこにしかないからきつとわかるはずだ。

回りの女の子たちの声の方が明らかに大きな声。

「だけど小さな」ああ…」の言葉を私は聞き逃さなかった。

園内には数えられないほどの人達がいて、みんなある一箇所に混在している

今年が終わるまであと5分。誰もがその瞬間を待ちわびていた。

落ち込んだ気持ちのまま、今年最後を迎えられずにいられるのは

私の隣にいる、この人がいるからだ。

冬の寒空の下でアイツの顔を見るのは2度目

一度目はあの雪山で。淡い色の瞳には月が映り込んでいて思わず目が奪われる。

” ありがとう ”

心の中で呟いた言葉は聞こえたはずはない。多分私の視線に気が付いたからだろう。

ふとアイツはこっちを見て、怪訝な顔をしながら口を開いた。

「お前… 体調悪そうに全然見えないんだけど」

” 体調なんて最初から悪くないんだよ ” と心の中で答えながらも、顔が綻んでいくのが分かる。

「うん。私今すっごく晴れ晴れしてる」

「ふうん…なあ一つ聞いていいか？」

”何？”と言うふうくに首を傾けると、アイツの顔が少し強張っているように見えた。

ドキン…

計算されたかのような端正な顔立ちに深い黒色の髪。淡いグレーがかった瞳。

その全てが月に照らされていて。真剣なその顔はまるで私の知らないアイツのようだ。

「慶と何かあった…？」

「…え」

突然の言葉に、否定も肯定しない私の代わりにアイツは続けた。

「今日駅で。慶を見た時、いつもと明らかに違った。

体調のせいかと思ったけど…そうじゃないんだろ？」

…そんなこと…気付いて…？

気付かないうちに少し離れた場所にいる沙希と彰くん、慶くんの姿がある。

だけど私の視界にはアイツだけが存在してるような気がする。

「それとさっき悪いけど聞こえた。」あとで話したい”って

聞こえてた…の？

顔を伺うように、アイツの表情を見ようとしたけれど

月が雲に隠されてしまってたらしく…はっきり捕らえることが出来ない

「…聞こえた通りだよ。慶くんと話したいことがあるの」

この人に嘘はつけない。つきたくない。だから私は正直に答えた。

「話の内容は言えない。…私だけの問題じゃないから。」

でも…

「でもね…」友達”としてだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

この言葉で私の気持ちが気付かれたとしても、もういいと思った。

そう言い切った私とアイツと視線が絡む。外しちゃいけない。

外すと私の言葉が信じてもらえないような気がしたから。

「さあみなさん今年も残すところあと10秒となりましたー!!」

一緒にカウントダウンしましょう!!9!8!…!」

やたらとテンションが高いMCの音がマイクを通して園内全体に広がる。

「5!4!…!」

時が止まってしまったようだ。

MCに合わせて沙希はカウントダウンをしていて、彰くんが慶くんの肩を組んで笑っている。

「2！1！」

新しい年を迎えたその瞬間。華やかに彩られた花火が上がる。

一つ。また一つ。

ここにいる全ての人の顔に、色とりどりの光が降り注ぐ。

「明けたね…おめでとう」

人々の熱気の中。かき消されてしまいそうな私の声に

”おめでとう”と返したアイツの声は

しっかりと私の耳に届いた。

第五十八話 二人の時間

「じゃあ12時にまたここでね」

午前3時

彰くんの解散宣言で、それぞれが家路についていく。

私と沙希は地元は同じだけど最寄り駅が異なる為違う路線だ。

沙希に改札口で”またね”と声を掛け、私は来た道を引き返す。

慶くんがああ2人にどういう理由をつけて別れてくるかはわからないけど

必ず来る。根拠なんてないけれど、確信を持って今このベンチに座っている。

それにアイツもこのことを知っている。

そのことがさらに私の確信を強くさせた。

「悪い待たせた」

その声にふと顔をあげた。

何を思っているか、何を考えているのか。表情からは全く読み取れない。

ただ何か決意を持ってここに立っている。そんなふうを感じる。

にこっと笑う私を確認して、隣りへそっと腰掛ける。

いつもは人ひとりいないような真夜中。だけどチラホラと人の姿を確認できる。

一年で今日だけの特別な雰囲気。

その雰囲気の中で言葉を交わさなくてもわかることがある。

慶くんはきつと姉の死を私達家族と同じように感じて、同じように傷付いて

そして今でも姉のことを大切に思っている。

だから簡単に話せることじゃないんだ。簡単に話したくないんだ。

でもね…？

でも”大切にする”って一つの形だけじゃないと思うんだ。

それが原因で前に進めなくなってしまったら…きっと姉は悲しむ。

私だからこそ慶くんに言えることがきつとある。

「優姉はね、苗字は違っけど血の繋がった姉なの」

私の言葉にピクツとかすかに反応したのがわかった。

「うち親が離婚してて…それで私が”立花”、姉が母の旧姓の”今井”」

”でも今は一緒の家に3人暮らしてる。変でしょ？”と続ける私に慶くんはゆっくり顔をあげ口を開いた。

「知ってる。優に聞いたことがあった…妹がアメリカにいる、って」

”優”

その言葉が姉と慶くんが過ごしてきた時間を物語っている気がした。

「慶くんと優姉は…付き合ってたの？」

答えは十中八九”Yes”。だけど慶くんの口から直接聞きたかった。

そんな私の考えは慶くんの言葉によって真実が変わる。

「ああ…付き合ってた。アイツが中三の冬からだよ」

「そっか。じゃあ…この頃はもう付き合ってたんだね」

鞆からすっと差し出した写真。”はい”と慶くんに向け、手に取るように促すと

私から写真を受け取った慶くんは少しだけ驚いて

そして懐かしい宝物を見るような優しい目でそれを見つめていた。

「…これで気付いたんだな」

納得したかのように呟かれた言葉に、私は一度頷いてみせた。

「ね…？優姉といつ知り合ったの？中学も違うでしょ…？」

私がアメリカにいた頃の姉を知りたかった。電話やメールなどでたまに連絡は取っていたものの

小学生の頃に別れてしまった私が知っている姉は、結局は文章上での想像でしかなかった。

「…アイツが中三でおれが中一の春。偶然だった。ただの」

「…中三か。でもちよっとショックだな…っ！優姉何も言ってくれなかつたから…！」

わざと明るく言ったのは、少なからず受けたショックを隠すためかもしれない。

「それは違う」

「…え？」

「優は自分の試験が全て終わって高校へ入って、落ち着いたら言う。って言うてたから」

そうだ。中三ということは受験生。私もその頃は連絡はいつもより控えていたんだ。

「だから立花に言いたくないとかそついうんじゃなかった」

そして姉は5月…あの事故にあった。だから私は知らなかったんだ…

「それに受験生なのに遊んでるって嫌われたらイヤだ。って笑ってたしな」

…バカだな。嫌うわけないじゃん。想いは止められないってこと今

は誰よりもわかってるつもりだよ。

「その全てを…おれが壊した」

はっとした。

前にも聞いた言葉。あの時の鋭い…それでいて悲しい瞳を思い出す。

目の前にいる人はあの時と同じ目をしている。

第五十九話 新しい光

だけど不思議と、慶くんが優姉に何かをしたかどうか

そういう考えは全く浮かんでこなくて

いたって冷静な私は、声を荒げることもないまま話を続けられていた。

「…前にも言ってたよね。どういう意味…？」

楽しそうに笑いながら一人、二人。高校生くらいの女の子が通り過ぎてゆく。

キュツ、キュツ。構内の床とスニーカーが擦れる音が聞こえ

やがて小さくなってまた静寂が訪れる。

それが合図かのように慶くんは重い口を開き始めた。

「あの日。事故に遭った日。会うはずだった…アイツと」

一瞬その意味がわからなくて。”え…？”と小さな声が私の口から漏れた。

言おうとして言った言葉じゃない。

ただ私の目には、居た堪れない表情を浮かべている慶くんが映っているだけだ。

「会うはずだった…？それが一体…優姉は脇見運転の車に…」

そう。姉は脇見運転の車に轢かれた。スピードはさほど出ていなかったけれど

打ち所が悪く、その日のうちに帰らぬ人となってしまった。

でもそれが一体…？

「アイツから待ち合わせの時間に遅れる、って連絡が来て

おれは”早くしろよ”って言った。冗談で”帰るぞ”…とも「

「それでアイツは…優は事故に遭った。一瞬の出来事…それで何もかもが終わってしまった」

驚くほど単純な答えだった。

恋人との待ち合わせに遅れそうになった彼女は、彼に少しでも早く会いたくて

懸命に走った。ただ会いたい一心で。笑った顔を見たくて…

姉の思いを考えると、溢れる涙を抑えることは出来なかった。

だけど、それを彼に責め立てるのは違うと思った。

私は涙を拭い、震えそうになる声を抑え、真っ直ぐ彼の方を向いた。

目に映るのは弱々しくさえ見える顔。少し涙が滲んでいるのかもしれない。

「慶くん間違ってるよ。そうじゃない」

私の言葉にゆっくり視線をあげる慶くんは、私は息を整えながら続けた。

「あれは事故なの。誰かが悪い。でもそれは慶くんじゃない。

慶くんが責任感を感じるんじゃない。それじゃ……」

そんなんじゃない……

言葉が詰まってしまふ。だけどこれは言わなくちゃ……私の声で

「優姉がかわいそうだよ」

慶くんの表情が変わったのがわかった。

どう変わったかなんて上手くは言えない。だけど変わった。

「……好きだった人にいつまでもそんな風に覚えていて欲しくない。

私なら楽しかったことや……一緒にしたこと。思い出して笑えるようなことを覚えていて欲しい」

「責任とか…そんなの必要ない。きつと優姉もそうだと思う」

自分のせいで好きな人が苦しんでいる…それを助けることも出来ない。

そんなの…苦しすぎるよ…

「それにね。

それに、覚えていて欲しいけどそれに捕らわれていて欲しくないから」

少し響いて数m先では消えてしまつかもしれない小さな声。

だけど強く…伝わって欲しいから…

「私のこと気になってるかもしれない、って言ったよね…？」

それってきつと…優姉と重なって見えたからだと思うの。もちろん
そういう恋もあるかもしれないよ？

でもそれは私じゃない。慶くんは私の中の優姉に見てただよ」

慶くんは何も言わずに…ただ頭を抱え込むような仕草を見せる。

そして少し肩が震えているような気がした。

「それともう一つ…」

”手に入れないほうがいい”なんて言わないで…?”

「それこそ優姉への罪悪感としか思えないよ。そうやって一生責任感じてくつもり…？」

誰も望んでないのに…。そんなの悲しいだけ…」

誰もが望んでいるような幸せな未来も叶わぬまま…一瞬にして消えてしまった大切な人

だけど辛さを心に引きずったままでも…誰も喜ばない。

” ああ… ”

小さく…小さくだけど聞こえたその言葉は、慶くんが何かを吹っ切ったからだと思いたい。

確かめたわけじゃないけれど…あのコスモスはきつと慶くん

同じ小説家が好きで…あんなに楽しそうな姉の笑顔…それにコスモスの花

優姉はきつと幸せだった。

…決して長い時間じゃなかった。だけど問題は長さなんかじゃない。

そうだよね…？優姉…

気が付けば窓から差し込む朝日が私たちを明るく照らしていて

新しいスタートにふと笑顔と涙が零れた。

第六十話 限りある今

ベッドに横になって目をつぶると

不思議な安心感と幸福感に、私はすぐに瞼を閉じた。

ムムムム...

携帯のアラームを止め、ゆっくりと起き上がると外で駆け回る子供の声が聞こえる。

きつとお正月ならではの遊びを楽しんでいるんだろう。

私は定番のお雑煮を食べると、急いで準備に取り掛かった。

髪を結び、いつもより濃い目にメイクをする

着物の場合はいつもこうだ。華やかな着物に顔だけが浮いてしまわないように。

ぎゅっと着物の帯を締めると気持ちも引き締まる。

「杏こっちこっち」

駅へと向うと、思った通り赤色系の着物を着た沙希が手を振って待っていた。

…カウントダウンの時もだけど、こういうイベント事には来るの早
いんだよね

「そんなに手上げると着物崩れちゃうよ」

顔立ちがはつきりしている沙希に、赤色が良く似合う。

…って何その顔？

沙希は眉間にしわを寄せて私の方をじっと見ている。

「何よ…？もしかしてどっか変！？」

久しぶりの着付けに不安になった私は、キョロキョロと自分を見回した。

…うん、特にない。じゃあ何だ？

「…化けたねえ」

感心して言うセリフじゃないでしょ…

っていつかそれは沙希も同じですからっ！！

「あ、化けたっていつか…倍増？どっちにしても嫌味」

「嫌味！？何でよっ…あ！」

昼間だと言っても冬ど真ん中の1月。羽織っていた白のストールが私の肩からするりと落ちそうになる。

うそ…！？こんなところで落としたら黒く汚れる…っ！

パシッ

え？

私が振り向いてストールの裾を持ち上げるよりも前に、後ろにいた誰かが落ちる寸前に止めてくれた。

「白は落としたらまずいだろ」

「…水嶋…恭介」

ストールの裾を持って、にこっと笑うアイツがそこにいた。

「あ…ありがと助かった」

ドキン。と高鳴る鼓動を抑えつつ、私はアイツからストールを受け取る。

「沙希ちゃん似合っつー！かわいいー！」

「本当？うれしいな、ありがとっ」

このバカップル…自由すぎ…

ラブラブ雰囲気を醸し出し過ぎな二人を横目に、ふう、とため息をつく。

「似合うじゃん着物」

「…え」

”馬子にも衣装”ってやつ？」

ニヤリ、と笑うアイツの顔が見えた。

…悔しいけどそんな言葉も嬉しくなってしまう

「…その言葉嬉しくないっ」

あの時は気持ちが高ぶって…伝えるって決めたのに…

こじやって意地張ってしまうのは私の悪い癖だ

「あれ、慶くんは？」

沙希はふと気付いたように辺りを見回しながら言った。

「うん、慶のヤツ急用で行けないって。連絡あったんだ」

”そっか。しょうがないね”と私に同意を求めるようにこちらを振り向く沙希に

”…そうだね”と答えるしか出来なかった。

『悪い。初詣はおれ行かない。…行くところがある』

別れ際に慶くんはこう言っていた。どこに行くのか、なんて聞かなくてもわかった。

きつと姉のところだ。何の迷いもなくそう思えた。

「おい行くぞ」

アイツの声に振り向く。この時間がいつまでも続くなんて限らない。

私はそれを知っているはずなんだ。だから…

「ありがとう。本当は嬉しかった」

意地張ってる時間なんてもったいない。こんなに近くにいるんだから。

隣に並んで見上げるとアイツの姿が私の目に映った。

第六十一話 君がいるから

「2000円です」

わずかなお賽銭と引き換えに一年の無事を祈った後

私たちは今年最初の運試し、おみくじを引こうということになった。

「やった大吉っ！」

「沙希ちゃんおれもっ！」

バカップル…もとい沙希と彰くんはどちらも大吉だったらしく

お互いのおみくじを見ながら、ああでもないこうでもないと話していた。

本当に仲いいなあ…少しだけ羨ましい。

何て思いながら二人を見ていると頭上からアイツの声がある。

「吉、ね」

そう。私が引いたおみくじは”吉”。良くも悪くもなく、自分次第でどうにかなるという運勢は、今の私にはぴったりかもしれない。

「そっちは？」

”おれ？”と自分自身を指差して聞くので、大袈裟に頷いて見せた。

「これ」

ひらり、と私の目の前で開いたそこには”吉”の文字。

「あ…同じ」

「ま、いいんじゃない？要は”自分次第”ってことで」

あまりにも同じ考えだったので、少し驚いたあとふっ、と笑ってしまった。

「結ぶだろ？」

”あの二人は持って帰るだろうからな” 沙希と彰くんを指差して笑った。

そこにはすでにたくさんのおみくじが結び付けられていて、少しの隙間も見当たらないくらいだ。

「…わ。どこにしよう」

上の方は空いていて、普段の私なら手を伸ばせば届く範囲

だけど今日は着物なので、両手を思い切り上げることが出来ない。

…この辺でいっせ

詰めれば一人分くらいなら入る狭さ。

結び付けようとするどぶと目の前に手が出された。

「え？」

「貸せよ。手、上げられないんだろ？」

”早く貸せ”と言わんばかりにもう一度手を差し出されたので

私はそつと自分のおみくじをアイツの手の上へ置いた。

そっだ。この人はこういう人だ。

さりげない優しさ…何気ない言葉

本人は気が付いてないかもしれないけれど、私は何度この人に助けられたらろう

「よし終了」

その言葉に視線を向け、隣り合った二つのおみくじを見る。

それだけで嬉しくて胸が痛くて…切なくなる。

想いが溢れて出してくる。

「好き」

何の前触れもなく出た突然の言葉に、自分でも説明なんか出来ない
驚いたようなアイツの顔が私の瞳に映る。

だけでももう止められない。

「水島 恭介が好き。こんな些細なことで泣けちゃうくらい…好き」

周りの誰一人として、私の声に耳を傾けている人はいない。

たった一人…その人だけに向けられた言葉。

視線が絡む。

アイツはふっと目線を下げ、呆れたように笑って言った。

「…いきなりすぎね」

「…「じめん」

だけど今言わなきゃって。そう思ってしまったんだ。

呆れたような顔を見たくなくて、顔を背けてしまった私の視界が急に暗くなる。

…え

「…慶のこと…話ついたのか？」

その声の近さで、今自分がどういう状態にいるのかはつきりわかった。

すぐそばで聞こえるアイツの声…温かい体温…私をすっぽりと包む長い腕

頭がクラクラしそうだ。

「…うん。あの…でも理由は…」

「うん。杏が言わないなら聞かない」

何で今私はアイツの腕の中にいるのか…なんでそんな優しい声で語りかけてくれるのか…

考えようとしてもわからなくて。ただどこの手を離したくなくて…

「…何で?…何でこんなに優しいの…?」

聞きたくて聞けない。でもその答えが全ての答えのよつな気がする。

震える声を必死に堪える。望んだ答えじゃなくても後悔なんてしない。

だってそれは今を大切にした”証”だから。

「バーカ」

…!?

「ちょっとバカって…!?!」

思いも寄らない返事にパツと顔をあげてしまった。

いくらなんでもこの場面で言う言葉じゃないでしょう!？

目が合う。アイツは優しい顔で笑っている。

駄目だ…やっぱり私この目に弱いよ…

涙を堪えている私に向けてアイツは言った。

「好きだから。多分お前よりずっと前から」

もう止められない。涙はせきを切ったように溢れ出す。

アイツの胸に顔を埋めると…ぎゅっと…

アイツの腕にぎゅっと力がこめられるのを感じた。

あの日君に会わなければ、慶くんに会うこともなかった

あの日君に会わなければ、優姉の生きた時間を知る事は出来なかった

あの日君に会わなければ、…こんな幸せな気持ちにはきつとなれな
かった

最悪な出会いだった。最初はそう思ってた

だけど…君がいたから私は強くなれた

そして、これからも強くいられる。

それは…君がいるから。

エピソード

「ふんふんふん ふんふん」

「ふんふんふん」

「ちょっと沙希…いい加減そのニヤけた顔やめてよ」

「無理。だって面白いから」

「…」

1月5日。まだお正月気分真っ只中のある喫茶店。

私と沙希は向かい合ってお茶をしていた。

学校というほぼ毎日顔を会わせる場所があるにせよ今は休み

沙希はどうしても私に会いたかったらしい。

2日は私が親戚付き合いの為、3・4日は沙希が親戚付き合いの為。

ようやく会えたのが今日の5日。

理由は聞くまでもなくきつとアレ。

なのに会った瞬間ニヤニヤと笑い出し、肝心な事は何一つ聞いてこない。

…だからその顔やめてっばー！！

「1日はお二人で消えちゃったようすでそれは付き合ってる私たちに遠慮してからののかな？…それとも」

…っし。

そう。あの日、初詣に行った日。おみくじを結びつけた私とアイツはそのまま抜けたのだ。

アイツが彰くんにもメールをしたのは知ってる。だけど私は沙希に出来ずにいた。

「…ごめん、怒ってる？」

「何で？私からかう気満々なんだけど？」

ぎゃあ！やめてー！

「冗談よ、冗談。幸せラブラブカップルからかって何が面白いの
」よ

…それって自分たちのことなんじゃ

思ったけど言わないでおこう。それが賢明だ。

「だけどびっくりした。急だったんだもん」

そう言ってキャラメルマキアートをコクリと一口。

確かに何も言っていなかったから驚いたのも当然だろうなあ…

「でもいずれこうなるとは思ってたけどね」

…ん？

「それは…沙希の妄想？」

「失礼なっ。ちゃんと理由あつてのことよ」

理由って…何？

私が思いつきり首をかしげると、沙希はふふふんと不適な笑みを浮かべている。

そして思いも寄らぬ言葉を口にした。

「彰くんに聞いてたんだよね。」 恭介のヤツ立花さんのこと気になつてるんじゃないのかな”ってね」

…え？…え？ええええ！？

「何それ…！？私聞いてないよ！？」

「だって確信はなかったんだもん。それに言ったら面白くないし」

…沙希はどこまでもやっぱり沙希。

あの癒し系の彰くと付き合おうとも素の沙希だ。

…彰くんはこついつとこに惹かれたのかな。裏表のない沙希に。

そんなことを思っていると、私の脳裏に嫌な考えがよぎった。

「…沙希ちゃん…まさか私のことは言っていないよ…ね？」

いくらなんでもそりゃないよね!?

「当たり前でしょ。そこはわきまえてますから」

ああよかった…。この3分ぐらいでやたらと喉が渴いてしまった…

私は冷め切ってしまった紅茶にゆっくりと口をつける。うん、落ち着く。

「良かったね」

沙希の言葉に視線だけを向けると、優しく笑う沙希の顔が見えた。

やっぱりこの笑顔は、沙希をいつもの数倍かわいく見せる。

「…うん。嬉しかった」

あの時、ふと想いが溢れてきて…気が付いたらアイツの腕の中で…

”好きだから。多分お前よりずっと前から”

「ちょっと。思い出し笑い禁止。根掘り葉掘り聞き出すわよ」

「あ…」

うそ！私笑ってた…！？

「ねえ今なんて呼んでるの？」恭介くん”？”恭介”？」

「ええっと…それは」

実は未だにアイツのことは”水嶋 恭介”。フルネームで呼んでい
る。

口には出さなかったけど、私の表情を見て沙希はわかったように呆れている。

…さすが幼馴染み。

「まあいいけど。でも心配させちゃだめだよ。」

「心配？」

「杏は鈍いんだから」

「まただ。これで一体何回言われたんだろっ…」

「あの初詣の日の告白だって”ヤバイ…アイツ絶対狙ってるだろ”って言ってたらしいよ」

「ヤバイ？狙ってる？何のこと？」

「だから鈍いって言ってんの。あんな姿で涙目であんなこと言われ
て思わず抱きしめちゃったってさ」

ぎゃあ！アイツ何言ってるの!？

「それを無意識にしちゃうんだもん。彼氏としては当然心配でしょ」
「？」

「…何がよ？意識的も無意識も別に変わらないじゃん」

「…ダメだこりゃ」

呆れかえっている沙希の顔が見える。…わからない。

すると沙希の鞆から携帯の着信音が聞こえた。

「あ、彰くんだった　はいはい」

多分いつまでもラブラブカップルなんだろうなこの二人は…

「あ……」

笑って沙希を見てみると、同じように私の携帯も鳴り始めた。

ディスプレイに写った文字は”恭介”

携帯だけの呼び名だ。

『心配させちゃだめだよ?』

別に…心配される理由なんかないけど…

私は携帯電話を勢いよく開いて、そして耳へあてた。

「もしもし…恭介?」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529d/>

君がいるから

2010年10月28日01時35分発行